

# 張籍詩訳注 (22)

——「湘江曲」「白鼉吟」「樵客吟」——

畑村 学

橘 英範

佐藤 大志

## The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (22)

Manabu HATANURA

Hidenori TACHIBANA

Takeshi SATO

**要旨** 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(22)である。本篇には、420「湘江曲」・421「白鼉吟」・422「樵客吟」(ともに中華書局『張籍詩集』巻七に載録)の訳注を掲載する。

### 訳注

420 湘江曲

#### 【題解】

湘江の曲。

『樂府詩集』巻九五に「新樂府辭」として掲載される。張籍以前にも以後にも同題の樂府詩は作られていない。

「湘江」は広西省に源を發し、湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ大川。『論衡』書虚に「屈原懷恨、自投湘江」(屈原恨みを懷きて、自ら湘江に投ず)とあるのは、戦国時代、楚の屈原が世に入れられず湘江で入水自殺した有名な故

事を記す。ただし、屈原が実際に入水自殺したのは、同じく洞庭湖に注ぐ川である汨羅とされる。

湘江と同じ川を指す「湘水」の語が、六朝の早い時期から詩語として使われるのに対し、「湘江」の語は唐以前の詩に詩題も含めて用例がない。語順を逆にした「江湘」であれば六朝の始めから詩文に見えるが、その場合は普通「長江と湘江」という二つの川を指し、こことは異なる。なお、湘江は洞

二〇一三年十二月二十日(受理)

畑村 学 宇部工業高等学校一般科准教授

「責任著者」

橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授

佐藤 大志 広島大学大学院教育学研究科准教授

洞庭湖を介して長江に注いでいる。『楚辞』九歎「遠逝」（劉向作）に「乘隆而南渡兮、逐湘江之順流」（隆波に乗じて南に渡り、湘江の順流を逐う）とあり、王逸はこの二句を「乘盛波、逐湘江之流」（盛波に乗じて、湘江の流れを逐う）と注しており、「湘江」を湘江（湘水）の意味で解釈しているようだ。他の『楚辞』中の「江湖」については、王逸は「江湖」、すなわち長江と湘水の併称であるとして解釈している。

詩以外の用例では、劉宋の袁淑「弔古文」（『藝文類聚』卷四〇）に「賈誼發憤於湘江、長卿愁悉於園邑」（賈誼 憤りを湘江に発し、長卿 園邑に愁悉す）とあり、前句は賈誼が湘江流域の長沙に放逐された故事を踏まえる。

唐詩では、初唐から多くの用例が見える。張九齡「餞王司馬入計、同用洲字」（『全唐詩』卷四八）に「獨歎湘江水、朝宗向北流」（独り歎く 湘江の水の、朝宗して 北に向かいて流るるを）とあるのは、南方桂州から上京する王司馬を見送る詩であり、北に向かつて流れる湘江の流れに王司馬の行程を重ね、羨望の念を詠じている。

杜甫には二例あり（うち一例は詩題に用いられた例）、「逃難」（『詳注』卷二三）に「歸路從此迷、涕尽湘江岸」（歸路 此より迷い、涕は湘江の岸に尽く）とあるのは、歸郷のあても無く、放浪先の湘江流域の地で涙が渇くまで泣いたと詠じている。張籍にはこの他一例、388「宿都庭有懷」（卷六）に「雷雨湘江起臥龍、武陵樵客躡仙蹤」（雷雨の湘江 臥龍を起こし、武陵の樵客 仙蹤を躡む）とあるが、徐余注では、詩の内容や収録するテキストを根拠にして、劉禹錫の作として張籍の詩から除外している。

湘水、湘江は、詩のなかでは平仄の関係で使い分けられるのである。「水」は去声、「江」は平声。

詩に詠われる湘江のイメージやその変遷については、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）の「名詩のふるさと（詩跡）」の「瀟湘」の項に詳しく、大いに参照した。

なお、徐余注は、貞元九年（七九三）、張籍が湘江の辺りを旅していた時の作と推定する。

【本文・書き下し文】

- 1 湘江無潮秋水闊 湘江 潮しお無く 秋水闊ひろし
- 2 湘中月落行人發 湘中 月落ちて 行人發し
- 3 行人發 行人 發し
- 4 送人歸 送人 歸る
- 5 白蘋茫茫鷓鴣飛 白蘋はびん茫茫として 鷓鴣しやこ飛ぶ

【口語訳】

- 1 湘江は潮が静かに収まって 秋の水が果てしなく広がり
- 2 湘中の地では月が沈んで夜が明け 旅人が出発した
- 3 旅人は出発し
- 4 見送る人は帰った
- 5 水面には見渡す限り白蘋が広がり その上を鷓鴣が飛んでいく

【押韻】

闊―入声十三末、発―入声十月（古詩通押）  
 歸・飛―上平声八微

【語釈】

- 1・2 湘江無潮秋水闊、湘中月落行人發

〔湘江〕川の名。湘水とも言う。用例や詳しい説明は【題解】を参照。

この詩を採録する『樂府詩集』（卷九五）や『全唐詩』（卷三八二）は「湘水」に作る。「湘水」は【題解】に記したように湘江と同じ川で、「湘江」が詩語としては唐代に入ってから用いられる比較的新しい言葉であるのに対し、「湘水」は、六朝の早い時期から詩語として使われている。張籍の5「寄遠曲」（卷二）に「美人来去春江暖、江頭無人湘水滿」（美人 来去して 春江暖かし、江頭に人無く 湘水満つ）とあり、遠くに去って行った美しい女性を思う男の恋情が詠われるなかに見えた。「湘水」の用例はこの詩の【語釈】を参照。

〔無潮〕波がない。「潮」は本来潮の満ち引きによって生ずる波。江南を象徴する自然現象の一つであるが、中国内陸部である湖南省を流れる湘江に海の潮の満ち引きの影響があるとは考えられず、ここでは湘江が中国南部を流れる川であることを表現するために「潮」と表現したと思われる。「潮（波）が無い」というのは、波が非常に穏やかで、舟旅をする者にとっては最適の状況になったことを言うのであろう。

「無潮」では、詩文に古い用例が見当たらない言葉であり、唐以前の詩にも未見、唐詩でも張籍以前に一例あるのみ。李嘉祐「白田西憶楚州使君弟」

『全唐詩』卷二〇七)に「山陽郭裏無潮、野水自向新橋」(山陽郭裏 潮無く、野水 自ずから新橋に向かう)とあるのは、城壁で囲まれた街のなかに川が流れ込んでいないことを言うのであろう。

杜甫には用例がない。張籍にもここ以外に見られないが、潮が止まった状態や、ゆったりと流れる状態を詠じた表現は他にも見える。423「春江曲」(卷七)に「春江無冰潮水平、蒲心出水鳧雛鳴」(春江氷無く 潮水平かにして、蒲心水より出でて 鳧雛鳴く)とあるのは、季節は春でこの詩が秋であるのと異なるが、この詩と同様に波の穏やかな江南の川(長江か)の情景を描写した楽府詩に見え、また徒詩である64「宿臨江駅」(卷二)に「月明見潮上、江静覚鷗飛」(月明かにして潮の上を見、江静かにして鷗の飛ぶを覚る)とあるのは、月明かりによつて江の潮がゆつくりと静かに満ちる様子が見えると詠われている。徐余注に拠れば、詩題の臨江駅は蕪州黄梅県(今の湖北省)の長江沿いにあつた駅の名であり、よつてこの詩と同じく江南の自然現象を詠じている。

「秋水闊」秋、湘江が漫漫と水を湛えて広がっている様子を言う。秋は雨の日が多く、川が増水する。

「秋水」は秋の川。ここでは湘江を指す。李冬生注も引くように、古く『莊子』に秋水篇が見え、その冒頭に「秋水時至、百川灌河、涇流之大、兩涘渚崖之間、不辯牛馬」(秋水 時に至り、百川 河に灌ぐ、涇流の大、兩涘渚崖の間、牛馬を辯ぜず)とある。秋になると雨が多くなるため川の水かさが増し、それが黄河に注ぐことで川幅が通常より広くなることを言う。また、『漢書』溝洫志に引く賈讓の上奏文に、「使秋水多得有所休息、左右游波寬緩而不迫」(秋水をして多く休息する所有るを得しめば、左右の游波 寬緩にして迫らず)と、同じく黄河の治水の方法について述べるなか「秋水」の語が見える。

文学的な作品としては、潘岳「秋興賦」(『文選』卷一三)に「澡秋水之涓涓兮、玩游儵之激激」(秋水の涓涓たるに澡ぎ、游儵の激激たるに遊ぶ)とあり、秋の澄んだ水の流れて口を漱ぐというところで、隱棲の志を述べている。李善注が「秋水」の典故として前掲『莊子』秋水篇を引いているように、秋水には世俗とは対照的な静謐な場所、隱逸の場所としてのイメージがある。張籍の詩でも、この語の持つ清浄さ、静謐さが、旅立ちの朝の場面(別れの場面)に相応しく、単に季節が秋であることで「秋水」と表現しているわけではない。

詩では劉宋以降になって用例が増え、例えば謝靈運「遊南亭」(『文選』卷二二)に「逝將候秋水、息景偃旧崖」(逝ゆく將に秋水を候ち、景を息めて

旧崖に偃せんとす)とあるのは、水かさの増した秋の川の流れに乗り、故郷の山陰に隱棲したい思いを詠ずる。

唐詩でも初唐から多くの用例が見える。盧照隣「送鄭司倉入蜀」(『全唐詩』卷四二)に「送君秋水曲、酌酒对清風」(君を送る 秋水の曲、酒を酌みて清風に対す)とあり、王維「輞川閑居、贈裴秀才迪」(趙注本卷一二二)に「寒山轉蒼翠、秋水日潺湲」(寒山 転た蒼翠、秋水 日々潺湲たり)とある。前者は、この詩と同じく別れの場面として秋の川が詠われる例であり、後者は心地よい音を立てて流れる秋の輞川を詠じている。王維の例は、世俗と対置される隱逸の場所に相応しい自然の景として秋水(輞川)が詠われている。

杜甫には十一例用例があり、うち「夜」(『詳注』卷一七)に「露下天高秋水清、空山独夜旅魂驚」(露下り天高くして 秋水清く、空山の独夜 旅魂驚く)とあるのは、杜甫の晩年、長江沿いの街である夔州に滞在中の作であり、清らかな秋の川は、長江あるいはその支流を指している。張籍にこの他二例、うち67「送遠客」(卷二)に「南原相送处、秋水草還生」(南原 相送る处、秋水 草還た生ず)とあるのは、旅の途上にある者(張籍自身)が、しばらくの間、生活や時間を共にした別の旅人を見送る別れの場面を詠じている。

「秋水闊」の三字の並びでは、唐以前の詩には用例がない。張籍以前の唐詩には三例見え(うち一首は詩題に含まれる)、劉長卿「洞庭秋遊湖州使還、寄李湯司馬」(『全唐詩』卷一四七)に「洞庭秋水闊、南望過衡峰」(洞庭秋水闊く、南に望んで衡峰を過ぐ)とあり、洞庭湖の水面が広がるさまを表現する。洞庭湖は、湘江が北上して注ぐ大湖。同時代の武元衡「送嚴紳遊蘭溪」(『全唐詩』卷三一六)に「暮雲秋水闊、寒雨夜猿啼」(暮雲 秋水闊く、寒雨 夜猿啼く)とあるのは、寂しい別れの情景を詠ずるなかに一面に広がる秋の川が見える。

「湘中」広く湘江流域の地を指す。今の湖南省のことで、その中央付近を湘江が南から北に向かって流れている。

經書や諸子の書には見えない。史書では『宋書』武帝紀上に「(盧)循之初下也、使(徐)道覆向尋陽、自寇湘中諸郡」(盧)循の初めて下るや、(徐)道覆をして尋陽に向かわしめ、自ら湘中の諸郡を寇す)と、東晋の盧循が湘江流域の諸郡を侵略したと記すなかに見える他、史書には地名として用例が見える。

この他、東晋の曹毗や顧愷之に「湘中賦」(ともに一、数句残存するのみ)があり、同じ東晋の羅含には「湘中記」があつたが未詳。いずれも湘江流域

の地の風物等を記したものであろうが、南遷後にこの地への興味関心が高まったことが想像される。

唐以前の詩に用例はない。唐詩では詩題には多く用いられるが、詩語としての用例は少ない。王昌齡「巴陵別劉処士」(『全唐詩』卷一四〇)に「湘中有來雁、雨雪候音旨」(湘中より來雁有らば、雨雪 音旨を候たん)とあり、湘江流域の地に帰っていく劉処士に対し、消息を雁書(手紙)で伝えて欲しいと詠うのは、詩語としての数少ない用例の一つ。詩題に用いられた例ではあるが、劉長卿に「湘中紀行十首」(『全唐詩』卷一四八)があり、其五「赤沙湖」に「秋水連天闊、潯陽何処歸」(秋水 天に連なりて闊く、潯陽 何れの処にか帰らん)とあるのは、張籍のこの詩と同じく「秋水」が「闊」と表現されている。ここでは詩題の赤沙湖が、秋になり果てしなく広がっている様子が詠われている。

杜甫には用例がなく、張籍の同時代及び張籍以降にも数例を数えるのみ。張籍と同時代の韓愈「送陸暢帰江南」(『繫年集釈』卷七)に「受恩不即報、永負湘中墳」(恩を受けて即ち報いず、永く湘中の墳に負く)とある。「湘中の墳」は、見送る陸暢の義父である董溪の墳墓を指す。韓愈は嘗て董溪の父・宣武軍節度使であった董晋の幕下にあつたことがあり、そのため「恩を受く」「湘中の墳に負く」といった表現をしている。

「月落」月が沈む。山や川などに月が沈み込み、まもなく夜が明けようとする時間を表す。夜明けを待つて、旅人は出発するのである。

普通に使われる言葉のようであるが、文字を逆さまにした「落月」も含めて経書や諸子、唐以前の史書に用例が見えない。

唐以前の詩では、東晋の歌謡「懊儂歌十四首」其一一(『樂府詩集』卷四五)に「月落天欲曙、能得幾時眠」(月落ちて 天曙けんと欲す、能く幾時の眠りを得んや)とある一例を除いては、梁以降の詩にしか用例が見えない。この歌謡は、愛する男性を思い一晚中眠れずに夜明けを迎えた女性の愁いを詠っている。

張籍の詩と同じく旅立ち・離別をテーマにした詩で用いられた例としては、梁の呉均「送呂外兵詩」(『藝文類聚』卷二九)に、「白雲浮海際、明月落河浜」(白雲 海際に浮かび、明月 河浜に落つ)とあり、別れの朝、すなわち旅人である呂外兵が出発する夜明け前、月が河の岸辺に沈み込む情景を詠っている。

詩中で「月落」と表現される場合、必ずしも夜明けを意味するわけではない。月が沈んで天空から姿を消すことで漆黒の夜となる場合にも、この「月落ちる」という表現が使われる。しかし、張籍のこの詩では、その後に旅人

の旅立ちの様子が詠われることから、夜更けではなく、夜明けを迎える直前の夜の時間を詠っていると解釈した。

唐詩の用例は初唐から見え、明らかに夜明け前の時間を指す例としては、岑参「宿蒲関東店、憶杜陵別業」(『校注』卷一)に「月落河上曉、遙聞春樹鴉」(月落ちて 河上暁け、遙かに春樹の鴉を聞く)とあり、長安に帰る途中の岑参が、関所である蒲津関の近くで夜を過ぎた翌朝の情景を詠っており、張籍の詩と同じく川辺(岑参の場合は黄河)に月が沈んでいく様子が詠われている。また、李端の「閨情」(『全唐詩』卷二八六)に「月落星稀天欲明、孤灯未滅夢難成」(月落ち星稀に 天明けんと欲し、孤灯未だ滅せず 夢は成し難し)とあるのは、男性を待つて眠れずに夜を過ぎた女性の閨情を詠ずるなかに見える。

陳注は、『唐詩選』にも採録される有名な張継「楓橋夜泊」(『全唐詩』卷二四二)に「月落烏啼霜滿天、江楓漁父對愁眠」(月落ち烏啼いて 霜 天に満つ、江楓 漁父 愁眠に對す)とあるのを引く。張継の詩は、旅人である張継の旅愁を詠じており、張籍の詩と共通する部分を含んでいるが、張継の詩の「月落」は、夜明けの風景を表すのか、それとも夜半の風景を表すのかは、諸説あつて定かでは無い。張継は張籍に先立つ中唐前期の詩人である。なお、詩中の「漁父」は、『唐詩選』などが「漁火」(漁り火)に作る方が人口に膾炙している。

杜甫には一例、「夜宴左氏莊」(『詳注』卷一)に「林風織月落、衣露清琴張」(林風 織月落ち、衣露 清琴張る)とあるのは、左氏の別莊で開かれる夜の宴会の様子を詠じているが、この場合「織月」(三日月)が落ちることと夜が深まることを表現している。

張籍にはこの一例のみ。同時代の白居易「曉別」0438に「月落欲明前、馬嘶初別後」(月は落つ 明けんと欲する前、馬は嘶く 初めて別るる後)とあるのは、詩題からも明らかのように別れの日の夜明け前、出発直前の様子を詠ずるなかに見える。

「行人」旅人。これまでも3「雜怨」(卷一)に「山川豈遙遠、行人自不返」(山川 豈に遙遠ならんや、行人 自ら返らず)とある他、6「行路難」・11「送遠曲」・14「別離曲」・27「閔山月」・32「羈旅行」(いずれも卷一)に見えた。それらの【語釈】を参照。

なかでも6「行路難」に「湘東行人長嘆息、十年離家婦未得」(湘東の行人 長く嘆息す、十年 家を離れ 帰ること未だ得ず)とあるのは、湘江流域(湘東)を旅する旅人が詠われており、この詩と詠われている場所が一致する。これ以外でも、436「送遠曲」(卷七)に「行人送客各惆悵、話離叙別



傾清觴(行人 送客 各おの惆悵し、離れを話し別れを叙して清觴を傾く)とあるのは、故郷を離れる旅人と、その送別の宴に参加した客(送客)との別れを詠い、「行人」が「送客」と対比されており、この詩の3・4句で「行人」と「送人」(見送る人)が対比されるのと類似する。

「行人発」の三字の並びでは、唐以前の詩文に用例はなく、唐詩でも中唐になってから用例が見え始めるようだ。張籍と同時代の王建「江南雜体二首」其二(『王建詩集』卷三)に「処処江草緑、行人発瀟湘」(処処 江草緑にして、行人 瀟湘を発す)とあり、白居易「筓峴東池」0972に「中宵把火行人発、驚起双棲白鷺鷺」(中宵 火を把りて行人発し、驚き起つ 双棲の白鷺鷺)とある。王建の用例は、江南の風景を詠ずる中で、瀟水・湘水流域を舟で行き交う旅人を詠じており、白居易の場合は、夜中にたいまつを手にして旅立ちとうとしたところ、池にいたつがいの白鷺が驚いて飛び立った様子を詠っている。

以上、冒頭の二句がひとまとまりになっており、旅人が出発する夜明け前の秋の湘江の情景を詠じている。波が収まって水面は穏やかであり、秋で水かさが増した湘江は、これから長い舟旅をすることになる旅人にとって、最適の条件が整ったことになるであろう。そうしたなか、月が沈み夜明けが直前に迫って出発の条件が整ったことで、旅人はいよいよ舟に乗って旅だつていくのである。

出発する時間は「夜が明ける」(日が上る)と表現してもよさそうなどころを「月が落ちる」と表現したことで、夜明け前の別れの情景に清浄さが付与されるとともに、離れ離れになる旅人(行人)と、旅人を見送る者(送人)の離別の悲しみがじんわりと伝わってくるような効果も挙げている。

また、二句は対句ではないが、対比の関係を意識した構成になっている。「湘江」と湘江流域の地を指す「湘中」(場所)、潮が止むと月が沈む(自然現象)、秋の水が広がる様子と、そのなかを舟で旅立つ旅人(静と動の動き)が、それぞれ対応している。両句は別れの場面を詠じている点では共通するが、二句を並べてみた場合、1句が「(潮)無し」「(闊)し」とあるように、静止した状態を詠じているのに対し、2句には「落つ」「発す」と動きのある動詞が使われている。夜明け前、ひっそりとした湘江の水辺の風景のなかを、旅人が旅立っていく様子が対比によって表現されていると言えよう。

3・4・5 行人発、送人帰、白蘋茫茫鷓鴣飛

「行人発、送人帰」旅人は出発し、見送る者は帰っていった。一見して明らかかなように、二句は対句の関係にある。かつ3句「行人発」は、2句の末尾三文字が繰り返される形となっており、所謂蟬聯体の手法が用いられていることがわかる。

「行人」が、事情は分からないが故郷である湘江流域の地を旅立つ人を指しているのに対し、「送人」は、ここでは旅人を見送る人を指す。「行人」が詩中に常見の語であるのに対し、「送人」は詩語としては一般的ではない。二字は普通、「人を送る」と「動詞+目的語」の形で読まれるが、ここでは徐余注が「送行之人」(「行人」を見送る人)と解釈しているのに従った。先述の通り、2句の「行人 発す」が3句でそのまま繰り返されていることから、2句と同様に3句は「行人 発す」と読むのが妥当であり、3・4句が形式的に対句の形を取っている以上、4句は「人の帰るを送る」ではなく「送人 帰る」と読むべきであろう。

唐以前の詩に二例見える「送人」は、いずれも「人を送る」の意味でここと異なる。唐詩の「送人」の用例は膨大にあるが、そのほとんどが詩題に用いられる例であり、またそのほとんどが「人を送る」の意味である。

二字を「見送る人」の意味で用いたと判断できる数少ない例として、張籍より少し前、中唐大曆期の詩人である劉商の「送楊閑侍御拜命赴上都」(『全唐詩』卷三〇三)に「親朋皆避路、不是送人稀」(親朋 皆路を避く、是れ送人の稀なるにあらず)とある。朝命を受け急いで長安に向かう楊閑を見送った詩であり、親戚や友人の見送り(送人)が少ないのは、楊閑を早く上京させようとしたからであると詠っていると考えられる。また、張籍と同時代の歐陽詹「觀送葬」(『全唐詩』卷三四九)に「他時不見北山路、死者還曾哭送人」(他時 北山の路を見ず、死者 還た曾て哭送の人)とあり、死者として北山(北邙山)に埋葬される人が、以前は人の死を悲しみ墓場まで死者を見送った葬儀の参列者であったことを言う。ここに「哭送の人」という形で見える。この二例を除き、張籍以後の詩人の例を概観しても、唐詩中の「送人」はすべて「人を送る」と読むのが妥当と判断できる例ばかりであった。張籍が「送人」の語を「見送る人」の意味で用いることが非常に希有であることがわかる。

類似した例として、見送る側の者を「送客」と表現した例が、前掲張籍の436「送遠曲」(巻七)に「行人送客各惆悵、話離叙別傾清觴」(行人 送客 各おの惆悵し、離れを話し別れを叙して清觴を傾く)とあり、一句のなかではあるが、「行人」が「送客」(送別の宴に参加した者)と対比して表現されており、この詩と類似する。

なお、3句「行人」を、『樂府詩集』・『全唐詩』・百名家集本は「送人」に

作っており、その場合、3・4句は「人の発するを送り、人の帰るを送る」と訓じ、旅人の旅立ちを見送り、旅人の帰郷を見送る、という意味になる。主語は擬人化された湘江であろうか。

「白蘋」秋に生い茂る中国南方に特有の水草。今の田字草のこととされる。

「蘋」は水草のことで、古く『毛詩』召南「采蘋」に「于以采蘋、南澗之浜」(于に以て蘋を采る、南澗の浜に)とあり、南の溪川の岸辺で水草を採ると詠われる。この「蘋」に「白」をつけた「白蘋」は水草の一種であり、後述するように、白は花の色を指すとも、胞子の表面に生える絨毛を指すとも言われ、よくはわからない。

「白蘋」の最も古い用例であり、かつ後世の詩文に大きな影響を与えたのが、『楚辞』九歌「湘夫人」に見える白蘋である。「登白蘋兮骋望、與佳期兮夕張」(白蘋に登りて望みを骋せ、佳と期して夕べに張る)とあり、会う約束をした佳人(湘夫人)を、生い茂る白蘋に登って待ち望むと記される。王逸注に「蘋、草、秋生。今南方湖沢皆有之」(蘋は、草、秋に生ず。今南方の湖沢 皆之有り)とあり、白蘋は秋に生ずる南方特有の水草と説明されるが、後世の詩文に登場する場合、白蘋が生ずる季節は必ずしも秋に限定されるわけではなく、むしろ江南の春を代表する風景として詠われる場合が多いようだ。

また、「湘夫人」に、会いたい人を待ち望む場所として白蘋が描かれたことで、『楚辞』以降の詩文では白蘋は、江南を代表する植物としてのイメージだけでなく、離別のイメージを伴うようになり、さらには後述するように、旅人に旅愁を抱かせる植物としてのイメージが付与されるようになる。

唐以前の詩には少ないながら用例が見える。張華「雜詩二首」其一(『玉臺新詠』卷二)に「白蘋齊素葉、朱草茂丹華」(白蘋 素葉齊しく、朱草 丹華茂る)とあるのは、春、池やその周辺に生ずる植物を詠ずるなかに見え、詩全体は、旅に出ている男性を思う女性の立場で詠われている。また、鮑照「送別王宣城」(『集注』卷四)に「既逢青春盛、復值白蘋生」(既に青春の盛んなるに逢い、復た白蘋の生ずるに値う)とあるのは、張籍の詩と同じく別れの場面を詠ずるなかに水面に生える白蘋が見える。この他、齊の謝朓「夏始和劉渢陵」(『謝宣城集校注』卷四)に「白蘋生已聘、細荷紛可襲」(白蘋 望まんとして已に聘せ、細荷 紛として襲ぬべし)とあり、梁の柳惲「江南曲」(『玉臺新詠』卷五)に「汀洲采白蘋、日落江南春」(汀洲 白蘋を采り、日は落つ 江南の春)とある。前者は『楚辞』湘夫人の表現をそのまま用い、初夏、白蘋が群生する場所を遠方を望む人がいると詠っており、後者は江南の春を代表する風景として白蘋が詠われている例であり、先述の張華

の例と同じく帰らぬ夫のことを思う妻の立場で詠われている。

『楚辞』湘夫人の王逸注では、先述の通り、白蘋は秋に生ずる水草とされている。先に引いた「湘夫人」の二句の前に「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」(嫋嫋たる秋風、洞庭波だちて木葉下る)とあることから、秋の湘江に生えている白蘋を述べているのは確かであり、張籍の詩も1句に「秋水」とあることから、季節が秋に設定されていることは明らかであるが、用例を見ると、白蘋は春や初夏の風景としても詠われている。『爾雅』枳草に「萍、萍、其大者蘋」(萍、萍、其の大なる者は蘋なり)とあり、『礼記』月令に「季春之月……萍始生」(季春の月……萍 始めて生ず)と言うように、蘋は晩春に生ずるとする記述もある。

「白蘋茫茫」(白蘋が水面に果てしなく広がるさま)と詠われるのは、晩春に生じた白蘋が、秋には水面一帯に広がるまで成長したことを表現しているのであろうか。それとも、別の種類の水草のことで、白蘋の言葉でそれらを代表させて詠じているのであろうか。ここでは、前者の意味で解釈することにした。

唐詩では初唐から用例が見え、多くが直接・間接に「湘夫人」を踏まえ、湘江や洞庭湖を中心とした江南の地での大切な人との別れが詠われる。駱賓王「在江南贈宋五之問」(『全唐詩』卷七七)に「秋江無綠芷、寒汀有白蘋」(秋江に緑芷無く、寒汀に白蘋有り)とあり、陳子昂「送客」(『全唐詩』卷八四)に「白蘋已堪把、綠芷復含榮」(白蘋 已に把るに堪え、綠芷 復た榮を含む)とある。前者は秋の水辺で白蘋を採り、それを古なじみの友人(詩題に言う宋之問)に贈ろうと詠う。後者は春、洞庭湖での別れの場面を詠うなかに見える。また、李白「淶水曲」(王琦注本卷六)に「淶水明秋月、南湖採白蘋」(淶水 秋日明らかに、南湖 白蘋を採る)とあるのは、秋に澄んだ川で白蘋を採集する女性を詠じたもの。詩には登場しないが、白蘋を採集するのは、好きな男性に送るためであろう。なお、王琦注に引く『爾雅翼』(北宋・羅願の撰)に「蘋、葉四方、中拆如十字。根生水底、葉敷水上。五月有花、白色。故謂之白蘋」(蘋、葉は四方にして、中ごろ拆けて十字の如し。根は水底に生じ、葉は水上に敷く。五月 花有りて、白色。故に之を白蘋と謂う)と言い、白蘋の「白」が旧暦五月(仲夏)に白い花を付けることからこのように言うと言明する。ただし、潘富俊『唐詩植物図鑑』(貓頭鷹出版、二〇〇一年)の解説に拠れば、白蘋は蕨類の水草で、胞子で繁殖するため白い花は咲かず、古人が見たのは長く密集した毛の生えた胞子の囊であると言う。

杜甫には五例あり、うち「清明二首」其二(『詳注』卷二二)に「風水春来洞庭闊、白蘋愁殺白頭翁」(風水春来たりて 洞庭闊く、白蘋愁殺す 白

頭の翁」とあるのは、杜甫最晩年、潭州（今の湖南省長沙市辺り）で詠われた詩であり、長安と対比して春の洞庭湖の湖面に広がる白蘋が詠われている。この詩の「白蘋」は、杜甫にとつて自分が異郷にあることを強く感じさせる植物として詠われているようである。また、「将赴成都草堂途中有作、先寄嚴鄭公五首」其二（『詳注』卷一三）に「処処青江帶白蘋、故園猶得見殘春」（処処青江 白蘋を帯び、故園猶お残春を見ることを得）とあるのは、晩春の季節、草堂の側を流れる錦江に浮かぶ白蘋を詠じたもの。

張籍にはこの他三例あり、43「江南春」（卷二）に「渡口過新雨、夜來生白蘋」（渡口 新雨過ぎ、夜來 白蘋生ず）とあるのは、暖かい春雨によって白蘋が水面に生じた江南の春の情景を詠じている。また、397「楊柳送客」（卷六）に「青楓江畔白蘋洲、楚客傷離不待秋」（青楓の江畔 白蘋の洲、楚客 離れを傷み 秋を待たず）とあるのは、「楚客」とあることから湘江一帯の水辺に生える白蘋を詠じていると考えられるが、徐余注ではこの詩は李益の詩とされ本集から削除されている。

以上、用例として挙げた「白蘋」について整理すると、①中国南方の川や湖に生える代表的な植物（水草）、②別離（男女・親しい者同士）のイメージ、③旅愁を抱かせる植物といったイメージが、①を必要条件として②や③が個別に、また重なる形で詠われているようだ。張籍のこの詩の「白蘋」は、①②③のすべてのイメージが備わっているようである。

「茫茫」白蘋が水面に広がるさま。秋になり、繁茂した白蘋が果てしなく湘江の水面に広がっている様子を言う。

張籍27「閔山月」（卷一）に「海辺茫茫天氣白、胡兒夜度黃龍磧」（海辺茫茫として 天氣白く、胡兒 夜に黃龍の磧を渡る）とあり、青海が遙か彼方まで広がるさまを表現している。用例はその【語釈】を参照。ことと同じく草が一面に広がる様子を言う例としては、128「送安西將」（卷二）に「万里海西路、茫茫辺草秋」（万里 海西の路、茫茫 辺草の秋）と、辺境の砂漠の彼方まで秋草が広がる様子を詠っている。

「鷓鴣」鳥の名。南方の江蘇・浙江の地や広東の地に棲息し、北方にはいない鳥である。鷓鴣ほどの大きさと黒色、胸には白く丸い点があり、背中には紫色の美しい羽毛がある。その鳴き声は「行不得也哥哥」（行つてはいけない、兄さん）と聞こえ、哀愁に満ちたものであるという。南方を旅する者に旅愁や懐古の情を呼び起こすものとして詩に詠われる他、「山鷓鴣」「鷓鴣詞」と題する曲辞では、旅愁とは逆に、旅に出たまま帰つてこない男性を思う女性の悲しみが詠われる。

鷓鴣の特徴や詩のなかに詠われる時のイメージについては、諸注および『中国文学歳時記』春（下）を参照（同朋舎、一九八八年。「鷓鴣」の項は、田口暢穂氏が担当）。また、韓学宏『唐詩鳥類図鑑』（貓頭鷹出版、二〇〇三年）には、写真付きで鷓鴣が紹介されており、南方特有の鳥であるため、故郷を離れた南方出身者がこの鳥の鳴き声を聞けば、すぐに望郷の念が起ると説明する。

唐以前の詩文では、唯一左思の「呉都賦」（『文選』卷五）に「鷓鴣南翥而中留、孔雀絳羽以翱翔」（鷓鴣 南に翥りて中ごろ留まり、孔雀 羽を絳りて以て翱翔す）とあるのみである。古の呉の地方の風物の一つとして記され、劉逵注に「鷓鴣、如鷄、黒色。其鳴自呼。或言此鳥常南飛不北。豫章已南諸郡、処処有之」（鷓鴣、鶏の如くして、黒色。其の鳴きて自ら呼ぶ。或ひと言ふ 此の鳥は常に南に飛びて北せず、と。豫章已南の諸郡、処処之有り）と言ふ。

唐以前の詩には見当たらないが、初唐になると詩中に用いられるようになる。李嶠「鷓鴣」（『全唐詩』卷五七。韋応物の作とも）に「可憐鷓鴣飛、飛向樹南枝」（憐むべし 鷓鴣飛び、飛びて樹の南枝に向かうを）とあるのは、三字の並びが張籍の詩と同じであり、夜中鳴き続ける鷓鴣が、苦勞して旅を続ける旅人の喩えとして詠われている。また、宋之問「在荊州重赴嶺南」（『全唐詩』卷五三）に「還將鷓鴣羽、重入鷓鴣群」（還た鷓鴣の羽を將て、重ねて鷓鴣の群れに入る）とあるのは、都の朝官（鷓鴣 飛ぶのに順序があることから朝官に準えられる）から嶺南に左遷させたことを南方特有の鳥である鷓鴣の群れに加わったと詠い、詩人の旅愁を引き起こすものとして登場する。先述の通り、旅人ではなく、残された者（女性）の悲しみを詠じた詩もある。蘇頌「山鷓鴣詞二首」其一（『全唐詩』卷七四）に「玉関征戍久、空閨人独愁」（玉関 征戍久しく、空閨 人独り愁う）とあるのは、出征した夫の帰りを待つ妻の閨情が詠われている。

この他、李白の「山鷓鴣詞」（王琦注本卷八）に「苦竹嶺頭秋月輝、苦竹南枝鷓鴣飛」（苦竹嶺頭 秋月輝き、苦竹の南枝 鷓鴣飛ぶ）とあり、「越中覽古」（同卷二二）に「宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛」（宮女 花の如く 春殿に満つるも、只だ今惟だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ）とある。前者は鷓鴣をテーマにした詩であり、南方の地を秋の月が輝くなか飛ぶ鷓鴣が詠われ、後者は過去の華やかさを失った越の地の様子を詠する懐古詩のなかに鷓鴣が登場し、三字の並びが張籍の詩と同じである。

杜甫には用例がない。陳注引く李益「山鷓鴣詞」（『全唐詩』卷二八三）に「湘江斑竹枝、錦翅鷓鴣飛」（湘江 斑竹の枝、錦翅 鷓鴣飛ぶ）とあるのは、三字の並びがこの詩と同じであり、湘江の辺りにいて、美しい錦の羽で



空を飛ぶ鷓鴣が詠われる。李益の詩は、旅に出た男性の帰りを待つ女性の視点で詠われたもの。

張籍にこの他二例あり、<sup>340</sup>「玉仙館」(巻六)に「楚客天南行漸遠、山山樹裏鷓鴣啼」(楚客天南 行きて漸いよ遠く、山山の樹裏 鷓鴣啼く)とある。玉仙館は今の江西省万案県にあった駅館の名。そこに楚の地を旅する旅人(張籍自身)が立ち寄った時の作で、鷓鴣の啼き声は旅人に旅愁を抱かせるものとして詠われているようだ。もう一例、<sup>399</sup>「揚州送客」(巻六)に「南行直入鷓鴣羣、万歳橋辺一送君」(南行して直ちに鷓鴣の群れに入り、万歳橋辺 一たび君を送る)とあるのは、揚州の万歳橋にて旅立つ人を見送る詩であり、南方に向かうことを「鷓鴣の群れに入」と表現している。これは前掲宋之間の詩を踏まえた表現であるが、徐余注ではこの詩を李益作として張籍の集から削っている。

張籍と同時代の白居易「山鷓鴣」0590に「啼到曉、唯能愁北人、南人慣聞如不聞」(啼きて曉に到り、唯だ能く北人を愁えしめ、南人 聞き慣れて聞かざるが如し)とあり、一晚中鳴き続ける鷓鴣の啼き声は、聞き慣れている南方の人にとってはなんでもないが、北方からの旅人にとっては旅愁を抱かせるものであると詠っている。

李冬生注は、中国の詩人たちはかつて「鷓鴣が飛ぶ」という表現を惜別の思いの比喩として用いたと言い、その例として杜牧「越中」(『全唐詩』巻五二六。『全唐詩』巻五三八には、許渾の詩としても採録される)に「石城花暖鷓鴣飛、征客春帆秋不帰」(石城 花暖かにして鷓鴣飛び、征客春に帆して 秋に帰らず)を挙げる。この詩は旅人である夫を待つ女性の立場で詠われており、花が咲くなかを飛ぶ鷓鴣には、舟旅を続ける夫が重ねられているのであろう。

以上、3と5句がひとまとまりとなっており、旅人と旅人を見送る人物の行動を対句によって対照的に詠った後、二人が去って行った後の湘江の情景を、中国南方の地に特有の動植物を用いて象徴的に表現している。

3・4句、旅人は出発し、見送る者は帰った、という表現には、離別に伴う二人の悲しみや旅人の旅愁といった感情は一切記されずに、誰が、何をしたら、行動の主体とその行動が記されるだけである。その行動も、ただ「発す」「帰る」と二人の行動がわずか漢字一字で記され、削る余地の無い極めてシンプルな表現である。しかし、二句が対句となることで、今後二人の距離が限りなく離れていき、再会が容易ではないという印象を読み手に抱かせた効果を上げている。

また、3・4句と5句との関係を見てみると、5句に詠われている湘江流

域の動植物を用いた情景は、二人が別れた後の湘江の情景を詠じていると考えられる。その見渡す限り湘江の水面に広がる白蘋は、ここでは旅人の果てしない旅路を象徴しているのであろう。さらに、その上空を飛ぶ鷓鴣は、舟に乗って北方へと旅立つ旅人の姿が重ねられていると考えられる。ここでの鷓鴣は、複数ではなく、一羽であるに違いない。

5句の白蘋と鷓鴣の関係について言えば、この二つは同じ句のなかで「色彩」と「物の動静」の二つの点で対比の関係にある。先述の李益「山鷓鴣詞」に「湘江 斑竹の枝、錦翅 鷓鴣飛ぶ」とあるように、鷓鴣の羽は美しい色彩をしており、それは水面に広がる白蘋の「白」と色の面で対照的な関係にある。また、湘江の水面に広がる白蘋が平面的でかつ静止しているのに対し、空を飛ぶ鷓鴣は直線的でかつ動的である。5句は一句のなかで、その他の句と同じように対比の関係が用いられていると言える。

【補】

一 「湘江曲」の構成

この詩は換韻によって二つに分かれ、前半1・2句では、旅人が出発する夜が明ける直前の秋の湘江の様子を詠じ、後半3・4句では、3・4句で旅人と旅人を見送る人物の行動を対比して描いた後、5句では二人が別れた後の湘江の情景を再び詠っている。

詩全体は、時間的・場面的に連続しており、換韻箇所で前・後半の内容が截然と分かれるわけではない。しかし、換韻は一句の字数の変化(1・2句―7言 ↓3・4句―3言 ↓5句―7言)とともに、張籍の構成面での意図を反映していると考えられる。

張籍の構成上の意図が強く窺えるのが2句と3句である。2句から3句のところまで換韻が行われているが、同じ箇所には蟬聯体の手法が用いられて「行人発」の表現が繰り返され、しかも一句の文字数も七言から三言へと変更されている。

張籍は、なぜこの箇所には蟬聯体の手法を用いたのであろうか。また、同じ箇所なぜ一句の文字数を変えたのであろうか。

1句では、まず果てしなく広がる湘江の水面が詠われる。2句は「月落つ」とあることから、旅人が出発する夜明けの時間の到来を表現しているのであるが、月が詠われたことで、詩の読み手(あるいは曲の聞き手)は月が沈む夜明け前の秋の空をイメージするであろう。そうであれば、1・2句には、



果てしなく広がる湘江の水面と、その上空の日が昇る前の秋の夜空が描かれていることになる。そして、そうした雄大な夜明け前の風景から、突然クローズアップされて、今まさに遠い旅に出発する旅人が登場するのである。果てしなく広がる湘江と日が昇る直前の白み始めた秋の空に比べて、旅人の姿はいかにも小さく頼りない。

続く3・4句は、2句の最後に登場した旅人と、その旅人を見送る人物の行動が詠われている。ここで張籍が押韻と一句の字数を変えているのは、夜が明ける直前の雄大な湘江の風景描写から、旅人の別れの場面への視点の変化をリズムの面からも表現しようとしたためであると考えられる。七言から三言にし、かつ対句で二人の行動を対照的に詠うことで、二人の別れが際立ち、別れが決定的で再会が容易ならぬことも伝わってくる。

5句で三言が再び七言に戻っているが、これは旅人や見送る人が去り、描写の対象が再び1・2句と同じ湘江の風景(動植物)に戻っているからである。

以上のように、「湘江曲」の構成を押韻や一句の字数との関係から見てきたが、張籍は、旅人の別れの場面を焦点化し、二人の別れの重大さを印象づけるために、蟬聯体の手法を用いたり、押韻や一句の字数に変化をもたせたりしていると考えられるのである。

## 二 「湘江曲」のテーマ

この詩のテーマは、詩題の湘江に関わる情景や風物を用いて、湘江を別れの舞台とした別離の悲哀と、それに伴う旅人の旅愁を描くことにあると考えられる。

詩には、「湘中」「潮」「白蘋」「鷓鴣」といった中国南方や湘江に関わる情景や風物を描いており、民歌的な要素が強く見える。しかし、すでに【語釈】で触れたように、それらは単に詩の舞台が湘江であることを示すものではなく、旅人とそれを見送る人の別離の悲哀と、別離後の旅人の旅愁を表現するためにこそ用いられた情景や風物であると言える。

詩の舞台である湘江(湘中)自体が、古えに舜帝の死に殉じた湘水の二妃(湘夫人)の伝説のある場所であり、離別や離別に伴う悲哀を想起させる場所として、後の詩文に大きな影響を与えている。

特に、この地に左遷された戦国時代・楚国の屈原が「湘夫人」のなかで、夫人を思慕するものが出会いが適わない憂いを記したことでその影響は決定的となった。「白蘋」は「湘夫人」で屈原が夫人を待ち望む場所として記されたことで、その後の詩文では、南方特有の水草という基本的なイメージに

加え、男女に限らず大切な人との別れやそれに伴う悲哀を想起させる植物としてのイメージを持つようになったのである。

この詩の「白蘋」もそうした別離の悲哀のイメージを担っているが、その旅人が男性であることは間違いないとしても、それを見送る人が、女性なのか、男性なのか、親族か、友人かは明確に記されていない。しかし、人物を限定しないことで却ってこの詩の別離が普遍性を備え、詩を読む者が自由に別れの状況を想像できるようにになっている。

「鷓鴣」も、南方の地に特有の鳥であるというイメージに加えて、旅愁や望郷、別離の悲哀を想起させる鳥として詩文に登場することは、【語釈】で用例を挙げて示した通りである。張籍は、単に南方の風物を詠うことではなく、湘江での別離の悲哀や旅人の旅愁を表現するために、そうしたイメージを持った風物を詩中に詠い込んだのである。

5句に描写される見渡す限り水面に広がる白蘋は、旅人の果てしない旅路を象徴しているのであるが、大切な人との別離の悲哀が湘江の水面を覆う白蘋のようにどこまでも広がって、この詩の情景を悲哀で染めている。また、旅人の象徴である鷓鴣は、孤独な旅人の旅愁を担って遙か彼方に飛んでいくのである。

以上、「湘江曲」は押韻や句法を工夫して一篇を構成し、湘江の風物を民歌風に詠い込みつつ、そこに別離の悲哀や旅人の旅愁を重ねる手法を用いており、これまで読んできた張籍の楽府詩と比べると非常に短い詩であるが、楽府詩人としての張籍の力量がうかがえる好個の作品であると言える。

(畑村 学)

## 421 白鼈吟

### 【題解】

白いワニのうた。

『説文解字』鼈部に「鼈、水虫。似蜥易、長丈所、皮可為鼓。从鼈單声」(鼈は、水虫なり。蜥易に似て、長さ丈所、皮は鼓と為すべし。鼈に从う單の声)とある(段注本による)。諸注および各種辞書によれば、別名を「猪婆龍」「揚子鱔」というワニの一種。一九九九年彩図本『辞海』(上海辞書出版社)によれば揚子鱔の学名は *Alligator sinensis*、我が国では「ヨウスコウワニ」あるいは「ヨウスコウアリゲータ」と呼ばれる。なお、段注によれば「丈

所」は「丈許」に同じく一丈ほどの意という。

この詩は『樂府詩集』では卷八八「雜歌謠辭六・謠辭二」の「呉孫亮初白鼉鳴童謠」の後に「白鼉鳴」と題して置かれており、他の詩人の作はない。この童謠は、『宋書』五行志二「詩妖」の条に、以下のように見えるもの。

孫亮初、公安有白鼉鳴。童謠曰、「白鼉鳴、龜背平。南郡城中可長生、守死不去義無成」。南郡城可長生者、有急、易以逃也。明年、諸葛恪敗、弟融鎮公安、亦見襲。融刮金印龜、服之而死。鼉有鱗介、甲兵之象。又白兵祥也。

孫亮の初め、公安に白鼉の鳴く有り。童謠に曰く、「白鼉鳴き、龜の背は平らかなり。南郡城中 長生すべきも、守死して去らざれば 義成る無し」と。南郡城 長生すべきとは、急有らば、以て逃ぐるに易きなり。明年、諸葛恪敗れ、弟の融公安に鎮たるも、亦た襲わる。融 金印の龜を刮り、之を服して死す。鼉には鱗介有り、甲兵の象なり。又た白は兵の祥なり。

すなわち、三国呉の廢帝・孫亮（二五二～二五八在位）の初年、公安（湖北省）で白いワニが鳴き、「白いワニが鳴いて、龜の背中は平ら。南郡（公安）の城中は長生きできるが、あくまで固執して去らなければ大義が成ることはない」という童謠が流行したという。「南郡の城中は長生きできる」とは、緊急事態が起こった場合に逃げやすいということであると説明されている。その翌年、専横が災いして諸葛恪が孫峻に殺され、その弟の諸葛融が公安を治めたが、融も孫峻に襲撃された。そこで融は金印にある飾りの龜を削ってそれを服用し、自殺したという。童謠の予言が当たったという話だろうから、恐らく融は緊急事態でありながら固執してすぐに逃げなかつたということになるであろう。ここでは「白鼉」について、ワニには堅いうろこがあるからよろいを着けた兵士の象徴であり、白は戦いの前兆の色であると解釈されているようだ。

諸注も引くこの話は、『晋書』五行志にも見え、また『三国志』呉書の諸葛融伝の裴松之注が引く『江表伝』にもより簡潔な形で見えているが、いずれにせよ、当時流行の童謠が後の事件を予言した話で、白いワニは後の戦闘の予兆となっている。

一方張籍のこの詩では、白いワニが鳴くのは雨が降る予兆ととらえられていて、孫亮の時の童謠とはかなり異なるイメージといえる。張修蓉『中唐樂府詩研究』（文津出版社、一九八五年）がこれを「古題新意」の部分に収めるのもそのためであろう。

ただし、押韻の方法は異なるものの（童謠は一韻到底の毎句押韻、張籍の作は最初の句に踏まず換韻する）、句の形式上は、張籍の作はこの童謠に七言句を一句増やしたものとなっており、「白鼉吟」の制作に当たって、張籍はこの童謠を意識していたと考えられる。そのことは、後に見るように、この童謠を除いて、詩中に「白鼉」が登場する先行作品がないことからもうかがえよう。

そのワニが「白」と表現されている点であるが、これは、『江表伝』が地の文の方の「白鼉」を「靈鼉」に作っていることからもうかがえるように、普通の灰色のワニとは異なる神秘的なものであることを表現しているよう。ただし、「揚子鱔」の語で中国の画像検索サイトを検索すると、光の加減や皮膚についた土が乾いたためと思われるが、かなり色が薄く、白に近く見える写真も稀ではなく、必ずしも荒唐無稽な表現というわけではないようだ。

ただし「白鼉」の語の用例は極めて少なく、古書には見えず、唐までの詩の用例も、前掲の孫亮の時の童謠以外には見えない。管見の及んだ限りでは、張籍に先立つ例としては、志怪小説に二例が見えるのみのようである。

一つは『搜神記』巻九に見えるもので、丹陽の謝非という道士が、旅の途中に日が暮れて、川のほとりの廟に泊まっていたところ、夜に廟を訪ねてきたものがあり、それに答えるものもいたので、答えたものに何が訪ねてきたかと問うと、「是水辺穴中白鼉」（是水辺の穴中の白鼉なり）と答えたという話である。答えたものの正体は鼉であり、夜が明けてから謝非が廟を壊してワニと鼉を退治すると何事も起こらなくなつたと結ばれている。

もう一つは『異苑』巻八に見える話で（『太平御覽』卷九三二は『幽明録』とする）、劉宋の武帝の永初年間（四二〇～四二二）、嫁入りしようとしていた娘が化け物に魅入られて突然いやがるようになり、巫祝に退治させたところ、川から蛇と鼉が現れ、最後に「有大白鼉從江中出」（大白鼉の江中より出づる有り）、みな退治されたというもの。憑いた化け物は一匹なのになぜ三四捕まえたのかと尋ねられた巫祝は、蛇が連絡係、鼉が仲人、ワニが花婿であると答えたという。

『全唐詩』中にはもう一例のみ、同時代の李賀の「黄家洞」（王琦注本卷二）に、「山潭晚霧吟白鼉、竹蛇飛蠹射金沙」（山潭の晚霧 白鼉吟じ、竹蛇飛蠹 金沙を射る）の句がある。広西の異民族の反乱を描いた詩で、南方の特異な自然を詠ずる中に用いられている。

以上のように、「白鼉」の表現は用例が非常に少ないが、『説文解字』に文字が収められていることからもうかがえるように、「鼉」の方は古くから多くの用例がある。

例えば、古く『礼記』中庸に「及其不測、鼉鼉蛟龍、魚鱉生焉、貨財殖焉」

(其の測らざるに及んでは、鼉鼉蛟龍、魚鱉生じ、貨財殖す)と、水中の生物を列挙する中にすっぽんと並べて「鼉鼉」と用いられている。同じく『礼記』月令の季夏の条にも、「命漁師伐蛟取鼉、登龜取鼉」(漁師に命じて蛟を伐ち鼉を取り、龜を登め鼉を取らしむ)と、水生生物を挙げる中に見えている。『莊子』達生に「孔子觀於呂梁、縣水三十仞、流沫四十里、鼉鼉・魚鱉之所不能游也」(孔子 呂梁を觀るに、縣水三十仞、流沫四十里、鼉鼉・魚鱉の游ぐ能わざる所なり)というのも、水生生物の代表として用いられた例である。

また、鼉の皮を用いて古くから太鼓が作られていたようであり、『毛詩』大雅「靈臺」には「鼉鼓逢逢、矇瞍奏公」(鼉鼓 逢逢たり、矇瞍 公を奏す)の句がある。

文学作品の中にもしばしば見られ、司馬相如の「子虛賦」(『文選』卷七)にも、雲夢沢の西にある泉や池の生物を列挙して、「其中則有神龜・蛟鼉・瑇瑁・鼈鼉」(其の中には則ち神龜・蛟鼉・瑇瑁・鼈鼉有り)というなどの例がある。

ただ、詩においては用例が少なく、唐までの詩においては、先に挙げた童謡を除くと、劉義慶の「遊鼉湖詩」(『初學記』卷八)の詩題に固有名詞として見えるのみで、詩の本文には用例が見えない。

唐に入ってから用例が多くなり、李嶠の「鼓」(『全唐詩』卷五九)に「仙鶴排門起、靈鼉帶水鳴」(仙鶴 門を排して起ち、靈鼉 水を帯びて鳴る)といい、張説の「和尹懋秋夜遊澗湖」(『全唐詩』卷八六)に「林尋猿狖居、水戲鼉鼉穴」(林に尋ぬ 猿狖の居、水に戯る 鼉鼉の穴)というなどの例がある。前者は、会稽の雷門にあった鼓に鶴が入って洛陽にまで音が聞こえるようになったという故事と対にして、鼉鼓を描写した例。後者は岳陽の澗湖での遊びを表現する際に、水生生物の代表として挙げた例。

そのような状況の中で、とりわけこの動物を好んで詠じた詩人が、張籍の敬愛する杜甫であり、続く元稹の五例を大きく超える十例の用例を残している。後に掲げる例との重複を避けて一例を挙げれば、「漢陂行」(『詳註』卷三)に、漢陂湖の不気味な生物を挙げて「鼉作鯨吞不復知、惡風白浪何嗟及」(鼉作り 鯨呑むも 復た知らず、惡風 白浪 何ぞ嗟くも及ばん)というのは、新題の樂府中に用いられた例。

ただ、先に述べたように、この詩においてはその鳴き声が雨の前兆として描かれているが、張籍以前にはその点に関して述べた用例は未見。鼉を神秘的なものとして描いた例には先行するものがあり、先に引いた李嶠の「鼓」(前出)に見えた「靈鼉」の語もそうであるし、杜甫の「送顧八分文学適洪吉州」(『詳註』卷二二)に「舟楫無根蒂、蛟鼉好為崇」(舟楫 根蒂無く、

蛟鼉 好く崇りを為す)という例も、マイナス方向ではあるが不思議な力を持つことを表現しているよう。

雨の前兆であることに關して、諸注は宋の陸佃の『埤雅』積魚(卷二)の「鼉」の部分に、「將風則狔躡、鼉欲雨則鳴。故里俗以狔譏風、以鼉譏雨」(將に風ふかんとすれば則ち狔躡り、鼉は雨ふらんと欲すれば則ち鳴く。故に里俗 狔を以て風を譏り、鼉を以て雨を譏る)というのを引き、李冬生注はさらに張籍のやや後の皇甫松の「大隱賦」(『文苑英華』卷九九)に、山中での隱者の生活を表現して「雉雉霧旦、鼉鳴雨天」(雉雉霧の旦にして、鼉鳴けば雨天なり)というのを引いている。

張籍と同時代には雨の前兆として表現されている例が一例見られるようであり、李賀の「江樓曲」(王琦注本卷四)に「鼉吟浦口飛梅雨、竿頭酒旗換青苧」(鼉吟じて 浦口に梅雨飛び、竿頭の酒旗 青苧に換う)といい、鼉が鳴いたことを梅雨の訪れと関連させて表現している。

そして張籍以後になると、雨の前兆としての例も数が増えてきて、許渾の「孟夏有懷」(羅時進『丁卯集箋証』卷二)に「魚躍海風起、鼉鳴江雨來」(魚躍りて 海風起り、鼉鳴きて 江雨來たる)といい、喻夔の「懷鄉」(『全唐詩』卷五四三)に「鼉鳴積雨窟、鶴步夕陽沙」(鼉は鳴く 積雨の窟、鶴は歩む 夕陽の沙)というなどの句が散見するようになる。

詩題「白鼉吟」の「吟」は、徐余注にも指摘する通り、樂府題によく見られるもので、「白頭吟」や「東武吟」(ともに『樂府詩集』卷四一)・「夜坐吟」(同前卷七六)などの古い樂府題があるほか、張籍自身も「節婦吟」(卷一)の新題樂府を作っており、ここでも「白鼉のうた」の意味でつけられたものである。ただ、上に挙げた李賀の二例が鼉が鳴くことを「吟」と表現していることや、『樂府詩集』がこの詩を「白鼉鳴」の題で収めているところからすると、あるいはワニが鳴く意味にもかけてつけられた題名かもしれない。

最後に、実際のワニについて触れておこう。  
この詩に詠じられるワニの鳴き声は、我々にはあまり馴染みがないものだが、ワニの間は、繁殖期を迎えると、雄が大きな声で鳴いて雌を誘うという(ライフ編集部編・岡田彌一郎訳・アルチャー・カー解説『爬虫類(改訂版)』、タイムライフブックス、一九七四年、および平凡社『世界大百科事典』・小学館『日本大百科全書』等)。

他の物音に誘われて鳴き声をたてることもよくあるようで、我が国の円山動物園では、ヨウスコウワニの繁殖期である毎年三月頃、その鳴き声によく似ていることから、太鼓を叩いて鳴き声をたてさせ、繁殖をうながすという(二〇一三年三月二二日共同通信配信のインターネットニュース記事より。

<http://www.47news.jp/CN/2013/02/CN2013022201001813.html>。なお、記事中ではワ



ニの声は「ボウ」「ボウ」と表現されている)。

なお、この、ヨウスコウワニの鳴き声が太鼓の音に似ていることに関して、先に引いた陸佃『埤雅』の続く部分にも「詩曰、鼉鼓逢逢。先儒以為鼉皮堅厚、取以冒鼓、故曰鼉鼓。蓋鼉鼓、非特有取於皮、亦其鼓声逢逢然、象鼉之鳴、故謂之鼉鼓也」(詩に曰く、鼉鼓逢逢たり、と。先儒 以て鼉の皮の堅厚なれば、取りて以て鼓を冒い、故に鼉鼓と曰うと為す。蓋し鼉鼓は、特に皮に取る有るのみに非ず、亦た其の鼓聲の逢逢然として、鼉の鳴くに象り、故に之を鼉鼓と謂うならん)と指摘されている。すなわち、鼉鼓という太鼓は、単にワニの皮を使って作るからというだけでなく、太鼓の音がその鳴き声に似ていることから「鼉鼓」と呼ばれるのだという。

これは繁殖期の例だが、繁殖期に限らず、何かの音に反応して鳴くこともあるようで、イスラエル空軍の戦闘機が発するソニックブーム(爆発音)に反応して、ゴラン高原のワニ飼育園で冬眠していたワニたちが発情して鳴いたというニュースも伝わっている(二〇一〇年二月二〇日AFP通信のインターネットニュース記事より。 <http://www.afbb.com/articles/2780174>)。

さらに、この詩に描かれているように雷が鳴る前から鳴くことも実際にあるようで、我が国の鳥羽水族館では、ヨウスコウワニではなく、ミシシッピーワニ(ミシシッピーアリゲータ)のようだが、毎年夏季になると、ワニが鳴くことよって雷雨の訪れを予想するイベントも行われているという(<http://www.aquarium.co.jp/event/>参照)。

この詩に詠じられる、「白鼉」が鳴くことによる雨占いも、ヨウスコウワニの住む地方の人々が、長年にわたる経験の中から身につけた知恵なのであろう。それが広く知られて、詩に詠じられることになったのが中唐期ということなのではないだろうか。

【本文・書き下し文】

- 1 天欲雨 天 雨ふらんと欲すれば
- 2 有東風 東風有り
- 3 南溪白鼉鳴窟中 南溪の白鼉 窟中に鳴く
- 4 六月人家井無水 六月 人家 井に水無く
- 5 夜聞鼉聲人盡起 夜に鼉聲を聞き 人尽く起く

【押韻】

風・中—上平一東

水—上声五旨、起—上声六止(同用)

【口語訳】

- 1 天気が雨になりそうになると
- 2 東風が吹き
- 3 南の谷川の白いワニが 穴の中で鳴き始める
- 4 猛暑の六月 人々の家の井戸には水がない
- 5 夜 ワニの鳴き声を聞き 人々はこぞって飛び起きる

【語釈】

- 1・2・3 天欲雨、有東風、南溪白鼉鳴窟中

〔天欲雨〕天気が雨になりそうになると。雨が降り出しそうになると。

〔天欲雨〕、この三字の並びで『漢書』游侠伝の樓護の条に「家狭小、官属立車下、久住移時、天欲雨」(家 狭小にして、官属 車の下に立ち、久しく住まりて時を移し、天 雨ふらんと欲す)と見える。大司馬衛將軍となつた王商が、属官の反対を押し切つて樓護の家を尋ねたところ、家が狭くて属官たちが外に立つたままつちうちに、雨が降りそうになるという場面。

唐までの詩には用例が見えないが、唐詩には他に一例、杜甫の「発閬中」(『詳註』卷一二)に「江風蕭蕭雲扈地、山木慘慘天欲雨」(江風 蕭蕭として 雲 地を払い、山木 慘慘として 天 雨ふらんと欲す)という。閬中から梓州への寂しい旅路を描写した例。

〔天欲〕の形では、『春秋』僖公二十一年の『左伝』に引く臧文仲のことばに、「天欲殺之、則如勿生」(天 之を殺さんと欲さば、則ち生ずる勿きに如かんや)というなど、古書にも用例が散見する。これは、早魃が起こつたことに立腹した僖公が雨乞いをした巫女を殺そうとしたのに対し、天に殺す意図があるなら最初からこの世に生を受けるはずがないと説得することばにおける例。

唐までの詩に数例、晋の「懊儂歌十四首」其十一(『樂府詩集』卷四五)に「月落天欲曙、能得幾時眠」(月 落ち 天 曙ならんと欲し、能く 幾時か眠るを得ん)といい、梁の費昶の「採菱曲」(『玉臺新詠』卷六)に「日斜天欲暮、風生浪未息」(日 斜めにして 天 暮れんと欲し、風 生じて 浪 未だ息まず)というなど、全てが日の出か日の入りを表現した例となっている。

唐に入つて、初唐期には例がなく、盛唐期から例が見え、張子容の「泛永嘉江、日暮迴舟」(『全唐詩』卷一一六)に「無雲天欲暮、輕鷁大江清」(雲無く 天 暮れんと欲し、輕鷁 大江清し)という従来通りの日の入りの用例が見える一方で、天候に関する例も見られるようになり、先に挙げた杜甫の「天欲雨」の例は雨に関する例、岑参の「送韓翼入都觀省便赴舉」(『校注』卷四)に「槐葉蒼蒼柳葉黃、秋高八月天欲霜」(槐葉 蒼蒼として 柳葉 黃ばみ、秋 高く 八月 天 霜ふらんと欲す)という例は霜に関する例。杜甫にはまた、「上白帝城二首」其一(『詳註』卷一五)に「天欲今朝雨、山歸万古春」(天 今朝に雨ふらんと欲し、山 万古の春に歸す)という形で、雨についての例が

「欲雨」の形は、古く『晏子春秋』内篇諫上に「天久不雨、髮將焦、身將熱、彼独不欲雨乎」(天久しく雨ふらざれば、髮は將に焦げんとし、身は將に熱からんとす。彼れ独り雨を欲せざらんや)と、「欲」を欲する意味で用いる例が見えるが、唐までの詩には用例が見えないようだ。

唐詩においては、李白の「夢遊天姥吟、留別」(王琦注本卷一五)に「雲青青兮欲雨、水澹澹兮生煙」(雲は青青として 雨ふらんと欲し、水は澹澹として 煙を生ず)といい、皇甫冉の「問正上人疾」(『全唐詩』卷二四九)に「地閑花欲雨、窓冷竹生風」(地 閑かにして 花には雨ふらんと欲し、窓 冷やかにして 竹には風を生ず)というなどの例がある。前者は夢で見た天姥の風景を詠ずる中に用いられた例、後者は見舞いにいった正上人の家の様子を詠ずる中に用いられた例。

杜甫の「欲雨」の例は先に挙げた「天欲雨」の形の一例のみ。張籍もこの例のみ。

〔有東風〕東風はひがしかぜ、習見の語。五行で東は春に当たるので春風をいうことが多く、氷を融かし万物を生育させる風とされている(『中国文学歳時記』春上「春風」の項参照。一九八八年、同朋舎出版。この項は石川忠久氏執筆)ただ、この詩の場合は、後に見えるように六月という設定になっているので、夏の東風ということになる。

古く『礼記』月令の孟春の条に「東風解凍、蟄虫始振」(東風 凍を解かし、蟄虫 始めて振るう)というのは春風の例。一方、『楚辞』九歌「山鬼」に「杳冥冥兮晝晦、東風飄兮神靈雨」(杳冥冥として 晝 晝に晦く、東風 飄りて 神靈 雨ふらす)という例は、王逸注に「言東風飄然而起、則神靈庇之而雨」(東風 飄然として起れば、則ち神靈 之に庇じて雨ふらすを言う)というように、東風が雨の前兆として表現されている例である。

唐までの詩にも数例見えるうち、「陌上桑 楚詞鈔」(『宋書』樂志三)に

「杳冥冥、晝晝晦、東風飄飄神靈雨」(杳冥冥として 晝 晝に晦く、東風 飄飄として 神靈 雨ふらす)という例は、「山鬼」に基づいた例。

この他には雨の前兆として描かれた例はないようで、謝朓の「奉和随王殿下」十六首其十六(『謝宣城集校注』卷五)に「清寒起洞門、東風急池樹」(清寒 洞門より起り、東風 池樹に急なり)と、荊州の早春の風景を詠じるなどの例が見られるが、季節が分かるものはやはり全て春の例となっている。

唐に入り、多くの例が見えるようになるが、やはり雨の前兆として描かれた例はないようだ。張旭の「春遊值雨」(『全唐詩』卷一一七)に「須倩東風吹散雨、明朝却待入華園」(須らく東風を倩いて 吹きて雨を散せしむべし、明朝 却つて待つ 華園に入るを)といい、劉長卿の「碛石遇雨、宴前主簿從兄子英宅」(『全唐詩』卷一四九)に「碛石雲漠漠、東風吹雨來」(碛石 雲 漠漠として、東風 雨を吹きて來たる)という例は雨と共に用いられた例だが、前者はすでに降っている雨を吹き散らし、後者は雨とともにやってくるものであり、雨の前兆とはいえないようである。

季節に関していえば、李嶠の「中秋月二首」其一(『全唐詩』卷六一)に「盈缺青冥外、東風万古吹」(盈ちて缺く 青冥の外、東風 万古吹く)という例は、中秋の日の月世界をいつも春風が吹く世界として描いているようであり、珍しい例といえよう。

杜甫には文字の異なる例を含めて四例、その異なる例ではあるが、「秋雨歎三首」其二(『詳註』卷三)に「關風長雨秋紛紛、四海八荒同一雲」の句の「關風長雨」を一本「東風細雨」に作る。もしそうであれば、雨とともに用いた例で、秋の風を「東風」と表現していることになる。

張籍には他に六例、444「惜花」(卷七)に「日暮東風起、飄揚玉階側」(日暮 東風起り、飄揚す 玉階の側)というなど、いずれも雨に関わりなく、春の風について用いられている。

〔南溪〕南の谷川。四庫全書本等は「南谿」に作るが、同じ。

唐には隋が置いた南溪県(四川省宜賓市)があり、またその属する戎州の別名として南溪郡の名称も用いられたが(『元和郡縣圖志』卷三一・『新唐書』卷四二二)、李冬生注が「山南河溝」とパラフレーズしており、他の諸注も特に注していないことから普通名詞と解していると思われる上に、鼉とこの南溪の地の関係が不明であり、張籍の他の例も別の場所を指しているため、ここでは普通名詞と解することとした。

ただ、杜甫が昭化県(四川省广元市)で作った「桔柏渡」(『詳註』卷九)に「急流鶻鶻散、絕岸鼉鼉驕」(急流 鶻鶻散じ、絶岸 鼉鼉驕る)の句が見え、閬中(四川省閬中市)で作った「玉臺觀二首」其一(『詳註』卷一三)

に「江光隠見鼯窟、石勢參差鳥鵲橋」(江光 隠見す 鼯窟の窟、石勢 參差たり 鳥鵲の橋)の句が見えているように、現在は数が激減して安徽省宣城市などごく一部の地域で保護されているヨウスコウワニも、唐代には四川省辺りにも棲息していたか、あるいは少なくとも棲息していると表現しても違和感を感じられなかったようなので、固有名詞の可能性も否定し去ることはできないと思われる。

「南溪」は古書に用例が見えず、唐までの詩における唯一の例である、春秋時代の秦の宰相であった百里奚の妻が作ったとされる「琴歌三首」其三(『樂府詩集』卷六〇・『太平御覽』卷五七六に引く『典略』)に、「百里奚、百里奚。母已死、葬南溪」(百里奚、百里奚。母已に死し、南溪に葬る)と見えるのが古い例の一つであろうか。この南溪はどこかの南溪か不明。

唐に入っても用例は少なく、張籍に先立つ詩の本文の例は二例のみ、宋之問の「雨從箕山來」(『全唐詩』卷五一)に「晴明西峰日、綠縵南溪樹」(晴明 西峰の日、綠縵 南溪の樹)といい、杜甫の「送韋郎司直歸成都」(『詳註』卷一二)に「為問南溪竹、抽梢合過牆」(為に問う 南溪の竹、抽梢 合に牆を過ぐべし)という。宋之問の例は、詩題にいう箕山(河南省登封市)からあまり遠くない場所を指すと思われるが、同じ宋之問に「泛鏡湖南溪」(『全唐詩』卷五二)という詩題の例もあつて、こちらは鏡湖(浙江省紹興市)の南の谷を指すなど、同じ詩人においても別の場所を指す例があるように、特定の場所のイメージはなかったようである。杜甫の例は梓州での作、成都に帰る人に托して成都の草堂を思うもので、仇注も「南溪、即浣花溪」(南溪は、即ち浣花溪なり)と指摘する通り、草堂の南側を流れる浣花溪を指している。

張籍には他に詩題に一例、詩中に二例。332「同韓侍御南谿夜賞」(卷六)の詩題とその詩中に「喜作閑人得出城、南溪兩月逐君行」(喜ぶ 閑人と作りて 城を出づるを得るを、南溪 兩月 君が行を逐う)といい、466「祭退之」(卷七)に「移船入南溪、東西縱篙撐」(船を移して 南溪に入り、東西 篙撐を縱にす。なお底本は「篙撐」を「篙根」に作るが、押韻に合わない)ので『全唐詩』に従った)というもので、いずれも長慶四年(八二四)、韓愈とともに長安の城南にあつた韓愈の別荘に遊んだ際に、その南にあつた谷川に舟を浮かべた時のことを述べた例(後者は韓愈の死後の追憶)。韓愈自身も「南溪始泛三首」(『繫年集釈』卷一二)の作を残している。

以上のように、普通名詞と解しても、管見の及んだ限りでは鼯と関わる例はなく、なぜ南の谷なのかはよく分からない。あるいは後に出るように六月すなわち設定されている夏の季節が、五行で南に配当されるためであろうか。

〔白鼯鳴窟中〕白いワニが穴の中で鳴いている。

「白鼯」および鳴くことについては、【題解】参照。

「窟中」は巢穴の中。

古書には用例が見えないようである、西晋の夏侯湛の「獵兔賦」(『藝文類聚』卷六六)に「曙毫末而放鏃、乃殪之於窟中」(毫末を曙て 鏃を放ち、乃ち之を窟中に殪す)という例などが古いもののように見える。ウサギの巢穴を表現した例。

唐までの詩にも一例のみ、張正見の「紫驢馬」(『文苑英華』卷二〇九)に「影絶乾河上、声流水窟中」(影は絶ゆ 乾河の上、声は流る 水窟の中)というもので、「〇窟の中」の形で用いられている。

唐詩においても用例は少なく、張籍に先行するのは、高適の「寄宿田家」(『全唐詩』卷二二三)に「巖際窟中藏鼯鼠、潭辺竹里隠鷓鴣」(巖際の窟中 鼯鼠を藏し、潭辺の竹里 鷓鴣を隠す)という一例のみ、先行する可能性がある例として、寒山の「詩三百三首」其百六十(『全唐詩』卷八〇六)に「余家有一窟、窟中無一物」(余が家に 一窟有り、窟中 一物無し)という。前者は泊めてもらった農家の家の付近の風景描写に用いられた例でモグラやネズミの住み家となった岩穴を指し、後者は自分の家にある(家として)穴を指しているようだ。

「窟中」の語の用例は少ないが、鼯を穴の中に住むと表現した例は多い。【題解】に引いた『搜神記』にも「水辺穴中の白鼯」と表現されていたし、同じく【題解】に引いた張説の「和尹懋秋夜遊澗湖」(前出)にも「水に戯る 鼯窟の穴」の句が見え、「南溪」の語釈に引いた杜甫の「玉臺觀二首」其一(前出)にも「江光 隠見す 鼯窟の窟」の句が見えていた。

さらに例を挙げれば、張謂の「読後漢書逸人伝」(『全唐詩』卷一九七)にも「鶴鵲巢茂林、鼯窟穴深水」(鶴鵲 茂林に巢く、鼯窟 深水に穴す)の句があり、杜甫には「沙苑行」(『詳註』卷三)に「角壯翻騰麋鹿遊、穴深鏃蕩鼯窟窟」(牡を角べて 翻騰す 麋鹿の遊び、深きに浮んで 鏃蕩す 鼯窟の窟)という例もある。前者は世を避ける逸民を巢穴に隠れる鳥獣に比喩した例、後者は馬を描いた新題樂府における例で、深い水を泳ぐ馬が鼯窟の穴を覆すことを詠じている。

前半三句、一韻で一まとまり。二つの三字句は七言句一句分に当たり、雨の前兆としての東風を詠じる。第三句はそれを承けて主人公である白鼯が登場、もう一つの雨の前兆として南溪の巢で鳴き始めることが詠じられる。



## 4・5 六月人家井無水、夜聞鼈声人尽起

〔六月〕季夏六月。常見の語。

夏の終わりであり、古く『毛詩』小雅「四月」に「四月維夏、六月徂暑」(四月 維れ夏、六月 徂暑)と猛暑を詠じているように、暑くて日照りが起きやすい時期であろう。

唐までの詩においては、詩の本文に「六月」の後は用いられていないが、「月節折楊柳歌十三首」其六「六月歌」(『樂府詩集』卷四九)に「三伏熱如火、籠窓開北牖」(三伏 熱きこと火の如く、籠窓 北牖を開く)という例などは、六月の厳しい暑さを表現した例となっている。

唐に入り、張九齡の「奉和聖製燭龍齋祭」(『全唐詩』卷四七)に「六月徂暑、四郊愆陽」(六月 徂暑、四郊 愆陽)といい、李白の「送蕭三十一之魯中兼問稚子伯禽」(王琦注本卷一七)に「六月南風吹白沙、吳牛喘月氣成霞」(六月 南風 白沙を吹き、吳牛 月に喘ぎ 氣は霞と成る)。前者は『毛詩』に基づきつつ、猛暑の六月と陽気の盛んな四郊を対にした表現、後者は暑い吳の地方の牛は月を見て喘ぐという故事を用いながら、熱風の吹く六月の酷暑を詠じた例。

その一方で、例えば『春秋』僖公三年の経文に「六月、雨」(六月、雨ふる)と見えるように、雨の多い時期でもあったようである。詩においてそのイメージで用いられた先行例は見当たらないようだが、同時代には、李賀の「羅浮山人与葛篇」(王琦注本卷二)に「依依宜織江雨空、雨中六月蘭臺風」(依依として 織るに宜し 江雨の空、雨中の六月 蘭臺の風)といい、白居易の「蝦蟆」0257に「六月七月交、時雨正滂沱」(六月 七月の交、時雨 正に滂沱たり)というなどの例がある。

以上のように、雨が多いはずであるのに、同時に酷暑の時期でもあるため、降らないとなるとひどい旱魃になるといことから、六月に設定されているのである。

杜甫には三例あるうち、一例は六ヶ月の意味の例、残る二例のうち「漢陂西南臺」(『詳註』卷三)に「高臺面蒼陂、六月風日冷」(高臺 蒼陂に面し、六月 風日冷やかなり)という例は、楼台が高いため猛暑の六月でも涼しいという例で、暑い時期というイメージで用いられている。張籍にはこの例のみ。

〔人家〕人家、民家。38 「江南曲」(卷一)に「江南人家多橘樹、吳姬舟上織白苧」(江南の人家 橘樹多く、吳姬 舟上に 白苧を織る)の句が見えた。その【語釈】参照。

〔井無水〕井戸に水がない。諸注の指摘する通り、旱魃により井戸が涸れていることを表現している。

井戸が枯れることと旱魃を関連させて表現した例は、唐までの詩と初盛唐の詩には見当たらないようであるが、中唐大曆期になると、戴叔倫の「賦得古井、送王明府」(『全唐詩』卷二七三)に「久旱寧同涸、長年祇自清」(久しく旱すれば 寧ろ同に涸れん、長年 祇だ自ら清むには)といい、皎然の「同薛員外誼久旱感懷、寄兼呈上楊使君」(『全唐詩』卷八一五)に「涸井不累瓶、乾溪一憑軾」(涸井 瓶を累がず、乾溪 一に軾に憑る)というなどの例が見られるようになる。前者は古井戸に生き方を喩えた例、自分だけがずっと澄んでいるより、日照りに合わせて枯れてしまった方がよいと述べているようだ。後者は旱魃の描写、井戸が涸れてしまったため釣瓶をつけていないことをいう。

「井無水」の表現の用例は未見、「井無」の表現は、唐までの詩に用例がなく、唐に入って、李白の「贈張公洲革処士」(王琦注本卷九)に「井無枯榦事、門絕刺繡文」(井には 枯榦の事無く、門には 刺繡の文を絶つ)といい、顧況の「同裴觀察東湖望山歌」(『全唐詩』卷二六五)に「水淹徐孺宅恒乾、繩墜洪崖井無底」(水淹いて 徐孺 宅は恒に乾き、繩墜ちて 洪崖 井に底無し)という。前者は『莊子』天地に見える、子貢にはね釣瓶を使うよう勧められて断つた農夫の話を踏まえて、詩題にいう革処士の純粹な心を表現した例。後者は仙人洪崖が仙薬を作ったと伝えられる井戸を表現したもので、底が見えないほど深いことをいうようである。

杜甫には井戸がないことを表現する例はあるが「井無」の例はない。張籍には「○井無」の形でもう一例、453 「獻從兄」(卷七)に「冬井無寒氷、玉潤難為焚」(冬井 寒氷無く、玉潤いて 焚くを為し難し)という。從兄の人柄を、冬を経ても凍らない井戸と、火に焼かれても輝きを失わない玉に喩えた例。

「無(无)水」は、古く『周易』困の大象に「沢无水、困。君子以致命遂志」(沢に水无きは、困なり。君子 以て命を致し志を遂ぐ)というなど、散文にはしばしば用例が見られるが、詩における以前の例は未見。

張籍にはもう一例、12 「築城詞」(卷一)に「來時一年深磧裏、尽著短衣渴無水」(來たりし時より一年 深磧の裏、尽く短衣を著 渴するも水無し)の句があった。その【語釈】も参照。

〔夜聞鼈声〕夜ワニの声を聞く。「鼈声」、『樂府詩集』四庫全書本は「白鼈」に作る。

「夜聞」、語の用例としては、『呂氏春秋』季秋紀に「鍾子期夜聞擊磬者而悲、使人召而問之」（鍾子期 夜 磬を撃つ者を聞きて悲しみ、人をして召さしめて之に問う）」という古い用例がある。伯牙の琴をよく聞き分けたという鍾子期が夜に磬の音を聞いて悲しんだという例。また、『史記』項羽本紀に「夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也」（夜 漢軍の四面 皆 楚歌するを聞き、項王 乃ち大いに驚いて曰く、漢

皆 已に楚を得たるか、是れ何ぞ楚人の多きや、と）という例も名高い。唐までの詩においては、先に「六月」の語釈に「六月歌」を引いた「月節折楊柳歌十三首」（前出）の其八「八月歌」に「夜聞擣衣声、窈窕誰家婦」（夜に聞く 衣を擣つ声、窈窕 誰が家の婦ぞ）の句がある。どこからか聞こえてくる夜の砧の音を表現した例。また、江淹の「雜体詩」三十首其二三「謝臨川靈運 遊山」（『文選』卷三十一）に「夜聞猩猩啼、朝見鼯鼠逝」（夜に聞く 猩猩の啼くを、朝に見る 鼯鼠の逝くを）という。山中の自然を動物によつて表現した部分で、猩猩の夜の鳴き声表現した例。

唐に入つて多くの例があるうち、盧照隣の「贈益府裴録事」（『全唐詩』卷四一）に「朝看桂蟾晚、夜聞鴻雁度」（朝に看る 桂蟾の晩るを、夜に聞く 鴻雁の度るを）といい、喬知之の「巫山高」（『全唐詩』卷八一）に、「郢路不可見、況復夜聞猿」（郢路 見るべからず、況んや復た 夜に猿を聞くをや）というなどの例は、このことと同じく動物の声を聞く例で、前者は雁、後者は猿の鳴き声についている。

杜甫には詩題に一例、詩中に二例、「夜聞齊築」（『詳註』卷二二）に「夜聞齊築滄江上、衰年側耳情所嚮」（夜に齊築を聞く 滄江の上、衰年 耳を側つ 情の嚮かう所）というのは詩題と詩中に用いられた例、樂器のひちりきについて用いたもの。もう一例は「散愁二首」其一（『詳註』卷九）に「蜀星陰見少、江雨夜聞多」（蜀星 陰りて見ること少なく、江雨 夜に聞くこと多し）という例、雨音についている。

張籍の例はこれのみ。「鼙声」は以前の用例を見ない。『全唐詩』にも他には後の二例のみ。許渾の「送林处士自閩中道越由雪抵兩川」（『丁卯集箋註』卷一〇）に「鼙声応遠鼓、蜃氣学危樓」（鼙声 遠鼓に応じ、蜃氣 危樓に学ぶ）と、太鼓に応じて鳴くことが表現され、項斯の「送友人下第帰襄陽」（『全唐詩』卷五五四）に「草色連晴阪、鼙声離曉灘」（草色 晴阪に連なり、鼙声 曉灘を離る）と、朝になつて移動する様子が描かれているようである。

「鼙声」の例は少ないが、鼙が鳴くことについては、【題解】に挙げたように、多くの例があった。

ここでは夜の鳴き声が表現されているが、これについても、後の例ではあ

るが、許渾の「苦雨」（『丁卯集箋註』卷四。なお、『全唐詩』はこの詩を卷五三一の許渾の部分だけでなく、卷四九八の姚合の部分にも収めているが、羅時進氏『箋註』の考証に従い許渾の作とした）に「早秋仍燕舞、深夜更鼙鳴」（早秋 仍りて燕は舞い、深夜 更に鼙は鳴く）と、長雨の続く中、さらに鳴く鼙の描写がなされている。また、【題解】にも引いた陸佃の『埤雅』（前出）に引く『晋安海物記』に、「鼙宵鳴如桴鼓。今江淮之間、謂鼙鳴為鼙鼓、亦或謂之鼙更。更則、以其声逢逢然如鼓、而又善夜鳴、其数応更故也」（鼙 宵に鳴くこと桴鼓の如し。今江淮の間、鼙鳴を謂いて鼙鼓と為し、亦た或いは之を鼙更と謂う。更は則ち、其の声の逢逢然として鼓の如く、而して又た善く夜に鳴き、其の数 更に応ずるを以ての故なり）といい、鼙は夜に鳴くことが多く、その数が更（夜を五分した時刻の単位）に應じるとされている。

「人尽起」人々はみな飛び起きた。諸注が指摘するように、雨を待ちわびていたので、その前兆となる鼙の声を聞いて目を覚ましたというのである。

「人尽起」の三字の並びでは用例は見当たらないが、「人尽」の表現は、古く『春秋』桓公十五年の「左伝」に見える有名なことば、「人尽夫也、父一而已。胡可比也」（人は尽く夫なり、父は一のみ。胡ぞ比すべけんや）にも見えるなど、文章における用例は数多い。

ただ、詩には用例が少なく、唐までの詩には、「人」に修飾語が付き「尽」を動詞で用いた、蔡琰の「悲憤詩」二首其一（『後漢書』列女伝）に「既至家人尽、又復無中外」（既に至れば 家人は尽き、又た復た 中外無し）という例を見るのみ。苦勞の末に帰郷してみると家族はいなくなり、家も壊れていることを表現した部分。

唐に入つて、王績の「題酒店樓壁絶句」八首其六（五卷本『王無功文集』卷三）に「眼看人尽醉、何忍独為醒」（眼には看る 人の尽く醉えるを、何ぞ忍びん 独り醒むるを為すに）といい、岑参の「送許子擢第江寧拜親、因寄王大昌齡」（『校注』卷一）に「郷人尽來賀、置酒相邀迎」（郷人 尽く來たり賀し、置酒して 相邀迎せん）というなどの例が見えるようになる。

前者は『楚辞』漁父に基づいて、衆人がみな酔っていると表現した例、後者は科挙に合格して帰郷すれば郷里の人がみな祝いに來てくれるだろうという例。

杜甫に二例あるうち一例は「尽」を動詞として用いるもの、もう一例が「北征」（『詳註』卷五）に「微爾人尽非、於今猶活」（爾微かりせば 人尽く非なり、今に於いて 国は猶お活く）という例。安祿山の乱の際に活躍した陳玄礼について、もしあなたがいなかったら、人々はみな今のようにはいられ

なかつただろうと述べた例。

張籍には人に修飾語のついた形の例がもう一例、229「贈李杭州」(巻四)に「恵化州人尽清浄、高情野鶴共逍遥」(恵化 州人 尽く清浄、高情 野鶴 共に逍遥)という。詩題にいう李杭州(李幼公のこととされる)の教化によつて杭州の民がみな正直に暮らしていることを述べた例。

また、「尽起」の表現も、目を覚ます例ではないが、古く『尚書』金縢に「天乃雨、反風、禾則尽起」(天乃ち雨ふらし、風を反し、禾は則ち尽く起つ)と倒れていた穀物が全て起き上がることを表現した例があるなど、文章の中にはしばしば用例が見られる。

ただ、詩の例は「人尽」よりもさらに少なく、唐までの詩には未見、唐詩においてもこの張籍の他には用例がない。

ただ、それまで寝ていたのが何かのきっかけにより飛び起きることは、しばしば「驚起」の語で表現されている。唐までの詩においても、鮑照の「夢帰郷」(『玉臺新詠』巻四)に、「驚起空歎息、恍惚神魂飛」(驚起空歎息、恍惚神魂飛)の句がある。帰郷した夢から目覚めることを表現した例。

唐に入り、祖詠の「汝墳秋、同仙州王長史翰聞百舌鳥」(『全唐詩』巻一三)に「秋天聞好鳥、驚起出簾帷」(秋天 好鳥を聞き、驚き起きて 簾帷を出づ)という句がある。モズの美しい声を聞いて、喜んで飛び起きるといふ例。また、先に「欲雨」の語釈に引いた李白の「夢遊天姥吟、留別」(前出)にも「忽魂悸以魄動、恍驚起而長嗟」(忽ち魂悸きて以て魄動き、恍として驚き起きて 長く嗟す)の句がある。天姥山に遊んだ夢からの覚醒を描く部分。

ただ、「驚起」は杜甫にも張籍にも例がない。張籍が似た状況を表現した例としては、39「烏啼引」(巻一)に「少婦起聽夜啼鳥、知是官家有赦書」(少婦 起きて聴く 夜に啼く鳥、知る 是れ官家 赦書有るを)の句があった。捕らえられた夫が放免される予兆となる鳥の鳴き声に、若い妻が聞き入る様子を描いた例。

換韻されて二句で一まとまりとなった後半部分、前の句では雨が多いはずの六月でありながら雨が降らず、猛暑のため井戸が干上がるほどの旱魃となっている様子が、飾り気のないことばで淡々と描かれる。後の句は結び、そのような状況の中、夜に白鼈の声が聞こえてきたため、雨を待ち望んでいた人々が飛び起きる様子が、やはり簡潔なことばで描かれている。

### 【補】

この詩は、換韻があつて前半後半に分かれるが、先に述べたように、冒頭の二つの三字句は七言句一句分に当たるので、七言四句分ということになり、構成としては絶句のような起承転結と捉えうるように思われる。すなわち、雨が降る予兆としての東風の描写で歌い起し、それを承けてさらにもう一つの予兆であり詩の主題でもある白鼈が鳴くことが詠じられる。次に一転して猛暑の中の旱魃の様子が描かれ、最後にその旱魃が終わる予兆となる白鼈の鳴き声に飛び起きる人々が描かれて全体を結んでいるといえよう。

注目されるのは、感情を表現することばが全く用いられておらず、非常にシンプルなことばで事実だけが述べられているという点である。

この詩については、諸注も引く明の楊慎の『升庵詩話』に、唐人の詩の中で漢魏の歌謡の風を持つものとして、李白の「荊州歌」・李賀の「鄴城謠」と並んで挙げられているが、やはりその素朴な表現によるところも大きいであろう。

この詩の主題について、諸注は特に触れていないようだが、あるいはヨウスコウワニが棲息する地における当時の庶民の風俗を詠じたものと捉えられているということであろうか。もちろんそれでも充分なのであるが、全二十七字と短い上に、先に述べたように、感情を交えることなく、淡々とした力強い状況描写に徹していることから、かえって読者の想像力をさまざまに刺激する作となつていようと思われる。

白鼈の声を聞いて飛び起きる人々を詠じた結びの部分は特に印象的で、前の部分の「井無水」という簡潔な表現に隠された、酷暑の中の旱魃の苦しみが強く印象づけられ、それによつて、かくも天候に左右されやすい民衆の苦勞が偲ばれるものとなつていく。それは、自然の中で苦勞して生きる民衆に対する同情や共感へと結びつくこともあるうし、白鼈の鳴き声のような頼りないものに対する不満や苛立ちを感じた読者もいるかもしれない。さらには、災害が政治と関わりと考えられていた時代のことであるから、そのような天候不良をもたらした為政者への不満や憤りへと発展させる読みも成り立つであろうし、そのような不満や憤りを抱きつつもどうにもできず黙々と暮らしている民衆の生き方を描いた作として、深い悲しみやあるいは厳肅な気持ちを抱く読者もいるのではないだろうか。

松浦友久氏は「楽府・新楽府・歌行論―表現機能の異同を中心に」(『中国詩歌原論―比較詩学の主題に即して』所収、大修館書店、一九八六年)において、伝統的な楽府の特徴の一つとして「表現意図の未完結化」という点を挙げておられるが、この「白鼈吟」もその特徴が存分に發揮された作ではないかと思われ、小品ながら印象に残る作品となつている。

(橘 英範)



## 422 樵客吟

## 【題解】

木こりの歌。

張籍に始まる新題樂府。『樂府詩集』には採録されず、同題の作品も張籍以外に見いだせない。李樹政は木こりの生活を詳述した作品で、山に登って薪を拾い、枯れ枝を選んで斧で伐りとり、青葛で束ねて、仲間を待つて山を下ってゆく、そんな木こりの姿が紙上に浮かびあがってくるという。

「樵客」は木こり。六朝以前の古い用例は見当たらず、梁・王僧孺「答江琰書」（『藝文類聚』卷二六）に「其或蹲林臥石、籍卉班荆、不過田峻野老、漁父樵客に過ぎず」と、漁父とともに世俗を離れて山沢に暮らす人物として見える。詩の用例では、庾信「奉和趙王遊仙詩」（『庾子山集注』卷三）に「山精逢照鏡、樵客值圍棋」（山精は照鏡に逢い、樵客は圍棋に値う）とある。これは王質が棋をすする仙童に出逢ったという爛柯の故事を踏まえ、「樵客」は山の奥深くを訪れる者を言う。

唐詩に至って「樵客」の用例もやや増え、世俗を離れた世界の住人またはそこを訪れる人として多く用いられるようになる。張九齡「出為豫章郡途次廬山東巖下」（『全唐詩』卷四七）の「有趣逢樵客、忘懷狎野禽」（趣有りて樵客に逢い、懷を忘れて野禽に狎る）では、「樵客」は世俗から離れた世界の住人として、王維「桃源行」（趙注本卷六）の「樵客初伝漢姓名、居人未改秦衣服」（樵客 初め漢の姓名を伝え、居人未だ秦の衣服を改めず）は、桃花源を訪れた武陵の人を樵客と言う。

杜甫の用例は一例、「雨二首」其二（『詳注』卷一五）に「漁艇息悠悠、夷歌負樵客」（漁艇 息いて悠悠、夷歌す 樵を負う客）とあり、これは「樵客」の悠々自適に暮らすさまを詠む。

このように「樵客」は世俗を離れた世界の住人で、自適の生活を送る人物がイメージされる。そのような木こりの生活を詠む作品としては、孟浩然「采樵作」、儲光羲「樵父詞」があり、また杜甫に薪を採って売る女性の苦勞を詠む「負薪行」がある。これらの作品については【補】に述べることにする。

## 【本文】

- 1 山上採樵選枯樹 山上 樵を採るは 枯樹を選ぶ
- 2 深處樵多出辛苦 深き処は 樵多きも 出だすこと 辛苦
- 3 秋來野火燒樸林 秋來たりて 野火 樸林を燒き
- 4 枝柯已枯堪採取 枝柯 已に枯れて 採取するに堪えたり
- 5 斧聲坎坎在幽谷 斧聲 坎坎として 幽谷に在り
- 6 採得齊稍青葛束 齊稍を採り得て 青葛も束ね
- 7 日西待伴同下山 日西 伴を待ちて 同に山を下り
- 8 竹擔彎彎向身曲 竹担 彎彎として 身に向かいて曲がる
- 9 共知路傍多虎穴 共に知る 路傍 虎穴 多きを
- 10 未出深林不敢歇 未だ深林を出でざれば 敢て歇まず
- 11 村西地暗狐兔行 村の西 地暗く 狐兔行き
- 12 稚子叫時相應聲 稚子 叫びし時 相聲に応ず
- 13 採樵客 採樵の客
- 14 莫採松與柏 松と柏とを採る莫かれ
- 15 松柏生枝直且堅 松柏 枝を生ずるは 直にして且つ堅なり
- 16 與君作屋成家宅 君が与に 屋を作し 家宅を成さん

## 【押韻】

- 樹・取―上声九麌、苦―上声十姥（同用）  
 谷・束・曲―入声三燭  
 穴―入声十六屑、歇―入声十月（古詩通押）  
 行―下平十二庚、声―下平十四清（同用）  
 客・柏・宅―入声二十陌

## 【口語訳】

- 1 山の中に入って薪をとるには 枯れた樹を選んで採取する
- 2 山の奥深くまで入れれば薪も多く採取できるけれど 運び出すのが大変だ
- 3 秋になって野焼きの火が 鬱蒼と茂る樸の林を焼き
- 4 硬くて伐りにくい枝も もう枯れてしまつて伐り採ることができない
- 5 木を伐る斧の音が カーンカーンと 静かな深い谷間に響き渡り
- 6 伐りそろえられた木枝をとりあつめ 青いかずらのつるで束ねてゆく
- 7 日が西に傾く頃 木こりたちは仲間を待つて 一緒に山を下りてゆく
- 8 竹の担ぎ棒は わんわんと 木こりの身体のほうに大きくなつてゆく
- 9 彼らはみな帰り道のすぐそばに 虎の穴が多いことを知っている

- 10 (だから) 奥深い林の中から出るまでは 彼らは休もうとはしないのだ  
 11 村の西はずれは日の当たらぬ暗がり 狐や兎が横行するようなところ  
 12 幼い子どもの呼ぶ声がする時 父の木こりがすぐにその声に応じる  
 13 たきぎを採る木こりよ  
 14 松と柏とは伐り採らないでおくれ  
 15 松と柏から生えでる枝は まっすぐで しかも堅いのだ  
 16 おまえのために 家を作り 立派なお屋敷を建てられよう

## 【語釈】

- 1・2 山上採樵選枯樹、深処樵多出辛苦

〔山上〕 山の上。

古くは『周易』漸・象伝に「山上有木、漸。君子以居賢德善俗」(山上に木有るは、漸なり。君子は賢徳に居りて俗を善くす)とある。「漸」の卦は山☶の上に木☲があり、木がだんだん成長するにつれて、山もだんだん高くなるので、「漸」と名づけるという。

六朝の詩では谷との対で用いられることが多く、山の頂上や高いところを指し、また山上には「松」「柏」「雪」など高潔なイメージを喚起するものがあることされることが多い。例えば、左思「詠史詩八首」其二(『文選』卷二一)に「鬱鬱澗底松、離離山上苗」(鬱鬱たり 澗底の松、離離たり 山上の苗)とあり、劉楨「贈從弟三首」其二(『文選』卷二二)に「亭亭山上松、瑟瑟谷中風」(亭亭たり 山上の松、瑟瑟たり 谷中の風)とある。前者は高い山の上に若木が盛んに伸びゆくことを、後者は山の頂に生える松を詠む。

唐に至って、喬知之「下山逢故夫」(『全唐詩』卷八一)に「庭前厭芍薬、山上采藤蕪」(庭前 芍薬に厭い、山上 藤蕪を采る)とあり、これは『玉臺新詠』卷一所収の古詩「上山採藤蕪、下山逢故夫」(山に上りて藤蕪を採り、山を下りて故夫に逢う)を踏まえて、芍薬の思い(男性への思慕)に煩い、山に登って藤蕪を採取することを言う。他に白居易「朱陳村詩」047に「女汲澗中水、男采山上薪」(女は澗中の水を汲み、男は山上の薪を采る)とあり、これは政治的世界から離れた辺境の村の素朴な生活を詠み、男たちは山上にたきぎをとりに行くことを業とすることを言う。

杜甫に用例はなく、張籍にはもう一例、27「関山月」(卷一)に「秋月朗朗関山上、山中人馬蹄響」(秋月 朗朗たり 関山の上、山中の行人 馬蹄響く)とある。これは出征の兵士が、国境の関がある山の上を馬に乗って進む様子を描く例。

なお『全唐詩』は「山上」を「上山」に作る。「上山」は山に登る。薪を採りに山に登っていくことを言う。経書に用例はなく、古い用例は『晏子春秋』卷二に「景公出獵、上山見虎、下沢見蛇」(景公 獵に出て、山に上りて虎を見、沢を下りて蛇を見る)とある。

唐より前の詩では、『文選』に二例。魏文帝「善哉行」(『文選』卷二七)に「上山采薇、薄暮苦飢」(山に上りて薇を採り、薄暮には飢えに苦しむ)とあり、陸機「擬涉江采芙蓉」(『文選』卷三〇)に「上山采瓊蘂、穹谷饒芳蘭」(山に上りて瓊蘂を採り、穹谷には芳蘭饒し)とある。前者は山に登って薇を求めて食べる男性を、後者は、古詩「上山採藤蕪」(前出)を踏まえ、山に登って香草を採る女性を詠む。『毛詩』召南「草虫」の「陟彼南山、言采其蕨」(彼の南山に陟り、言に其の蕨を采る)に、女性が山に登って蕨(又は薇)を採り、会えない男性を思うというモチーフが見える。

唐に入って詩の用例も多いが、男性又は女性が山に登って何かを採取するという例は見られなくなる。「上山」が句頭にある例を挙げれば、王維「送友人歸山歌二首」其一(趙注本卷一)に「入雲中兮養鷄、上山頭兮抱犢」(雲中に入りて鷄を養い、山頭に上りて犢を抱く)とあり、王建「短歌行」(『王建詩集』卷一)に「上山遲、下山疾」(山に上ることは遅く、山を下ることは疾し)とある。前者は山上に登って放牧することを、後者は人の一生を山登りに喩えて、登ることは遅く、下ることは早いことを言う。

〔採樵〕 たきぎをとる。

古くは『春秋』昭公六年の『左伝』に「禁芻牧採樵、不入田、不樵樹、不采藝、不抽屋、不強句」(芻牧採樵を禁じ、田に入らず、樹を樵らず、藝を採らず、屋を抽かず、強句をせず)とある。これは、楚の公子が鄭を訪れた時、供の者に乱暴狼藉を働かないように、馬の放し飼いや薪を採ることなどを禁じたことを言う。ここで「採樵」は煮炊きの為に山林に入って薪を調達することを言う。また李冬生注に引く『毛詩』齊風「南山」に、「析薪如之何、匪斧不克。取妻如之何、匪媒不得」(薪を析くには之を如何せん、斧に匪ざれば克くせず。妻を取るには之を如何せん、媒に匪ざれば得ず)とある。また『史記』魯仲連伝の正義に引く『韓詩外伝』に「姓鮑、名焦、周時隱者也。飾行非世、廉潔而守、荷担採樵、拾橡充食」(姓は鮑、名は焦、周時の隱者なり。行いを飾り世を非り、廉潔にして守り、担を荷い樵を採り、橡を拾いて食に充つ)とあり、隱者鮑焦の清廉な暮らしぶりを述べる段に見える。

唐より前の詩の用例には、左思「詠史詩八首」其七(『文選』卷二一)に「買臣困采樵、伉儷不安宅」(買臣 采樵に困しみ、伉儷も宅に安んぜず)

とあり、朱買臣が薪を採る生活に困窮し、「伉儷」(妻)も家から去って行ったことを言う。また陳注の引く庾信「奉和趙王隱士詩」(『庾子山集注』卷三)に「霸陵採樵路、成都売卜錢」(霸陵 採樵の路、成都 売卜の錢)とあり、「霸陵」の句は、『後漢書』逸民伝に韓康という人物が名山で薬を採取して、長安の市で売っていたが、三十年余り後に霸陵の山中に入ったと記事に基づく。ここで「採樵」は隠者の行為として用いられている。

唐に至って詩の用例は多く、隠者の生活を象徴する行為として用いられる。孟浩然「山中逢道士雲公」(『全唐詩』卷一五九)に「采樵過北谷、売薬来西村」(樵を采りて 北谷を過ぎ、薬を売りて西村に来たる)、同じく孟浩然「田園作」(『全唐詩』卷一五九)に「望断金馬門、勞歌采樵路」(望は断たる 金馬の門、勞歌す 采樵の路)とある。前者は隠者の生活を詠み、後者は政治的望みを失い、薪拾いに従事することを言う。

「選枯樹」たきぎにする木は枯れた木を選んで採取する。

「枯樹」は經書・諸子に古い用例は見当たらず、『漢書』五行志に「又昌邑王国社有枯樹復生枝葉」(又昌邑王国の社に枯樹の復た枝葉を生ずる有り)とあり、これは枯れた樹木に枝葉が生じるという異変を記録したものだ。史書にはこの他にも枯れた樹木が再生するという現象を記録する。

詩の用例では、阮禹「駕出北郭門行」(『古詩紀』卷一七)に「骨消肌肉尽、体若枯樹皮」(骨は消え肌肉尽き、体は枯樹の皮の若し)とあり、継母に酷使される孤児のやせた体を「枯樹」に喩える。また呉均「行路難五首」其一(『玉臺新詠』卷九)に「茱萸錦衣玉作匣、安念昔日枯樹枝」(茱萸錦衣玉もて匣と作す、安んぞ念わん 昔日 枯樹の枝)とあり、これは枯樹が洛陽の名工によって琵琶にされ、重宝されることを言い、不遇から思わぬ幸福へと転換したことを言う。

また陳注の指摘する庾信「枯樹賦」(『庾子山集注』卷一)は、かつて世に名を知られた殷仲文が東陽太守となって地方に転出することになり、日々樂しまずに庭の槐樹の生気のない姿を嘆き、望郷の思いを述べた作品である。

薪に枯れ枝を用いることは、庾肩吾「経陳思王墓詩」(『文苑英華』卷三〇六。逸欽立は庾信の作とする)に「採樵枯樹尽、犁田荒墜平」(樵を採りて枯樹尽き、田を犁きて荒墜平らかなり)とあり、曹植の墓が誰にも顧みられず、墓の樹は枯れて焚き物として取り尽くされていることを言う。

唐に至って詩の用例は多く、王昌齡「長歌行」(『全唐詩』卷一四〇)に「下有枯樹根、上有鼯鼠窠」(下には枯樹の根有り、上には鼯鼠の窠有り)、李白「戰城南」(王琦注本卷三)に「烏鳶啄人腸、銜飛上挂枯樹枝」(烏鳶は人腸を啄み、銜み飛び上りて枯樹の枝に挂く)とある。前者は陵墓の樹が枯れ

ることで時間の推移を示し、後者は戦場で鳥や鳶が人のはらわたを枯れた枝にかけることを詠んで戦場の荒廃した状況を示すもの。

杜甫には一例、「乾元中寓居同谷県作歌七首」其五(『詳注』卷八)に「四山多風溪水急、寒雨颯颯枯樹湿」(四山 風多く 溪水急にして、寒雨颯颯として枯樹湿う)とあり、冬の雨に濡れる枯樹を詠む。

「枯樹」を薪に用いることを詠む例は、儲光羲「樵父詞」(『全唐詩』卷一三六)に「枯枝作採薪、爨室私自知」(枯枝 採薪と作り、爨室 私自ら知る)とあり、韓愈「枯樹」(『繫年集積』卷一二)に、「猶堪持改火、未肯但空心」(猶お持つて火を改むるには堪え、未だ但だ空心なるを肯んぜず)とある。前者は木こりの生活を詠んだ詩であり、木こりが枯れ枝をたきぎとして厨房(爨室)に用いることを言い、後者は枯樹が火を付けるのに役立ち、老いても猶お有益であることを言う。

「深処」深いところ。山の奥深くを指す。

常用の語のようだが、經書や史書に用例は無く、『抱朴子』外編・疾謬に「昔魯女不幽居深处、以致圍墜之變、孔妻不密潜戸庭、以起華督之禍」(昔魯女 深き処に幽居せず、以て圍墜の變を致す、孔妻 戸庭に密潜せず、以て華督の禍を起す)とあるのが、早い時期の用例のようである。これは魯の王女が深閨にこもつていなかったがために、圍人の壻に兄を殺されてしまったという『春秋』莊公三十二年の『左伝』に見える故事を踏まえ、「幽居深处」を宮殿の奥深くを指す。

唐より前の詩には用例が見当たらず、唐に至って詩の用例が見え始め、山や谷の奥深く、または木々が茂るところや雲が重なり合うところを指す。山の奥深くを示す例には、劉長卿「尋張逸人山居」(『全唐詩』卷一五〇)に「桃源定在深处、澗水浮来落花」(桃源 定めて深处に在らん、澗水 落花浮かび来たる)、王建「温門山」(『王建詩集』卷四)に「洞門昼陰黒、深处惟石壁」(洞門 昼に陰黒にして、深き処は惟だ石壁のみ)とある。前者は張逸人の住む山居が桃花源のように山の奥深くにあること、後者は洞窟の奥深くは石壁が続くことをいう。

張籍の用例は他に三例、49「聴夜泉」(卷二)に「細泉深处落、夜久漸聞声」(細泉 深き処より落ち、夜久しくして漸く声を聞く)、263「和韋開州盛山十二首・宿雲亭」(卷五)に「清浄当深处、虚明向遠開」(清浄 深き処に当たり、虚明 遠きに開く)とある。前者は山の奥深くの泉の音が夜が深まって静かになって聞こえてくることを、後者は山の奥深くに清浄な場所があることを言う。張籍のもう一例の353「春日早朝」(卷六)は雲が多く集まるところの意。



「樵多出辛苦」山の奥深くには薪が多いけれども、運搬するのに苦労することを言う。

「樵」は薪。『春秋』桓公十二年の『左伝』に絞国の軍を城外に誘い出すことを献策する莫敖屈瑕の言葉に「絞小而軽、輕則寡謀。請無扞采樵者以誘之」(絞は小にして軽し、軽ければ則ち謀寡し。扞無き采樵者以て之を誘うを請う)とあり、杜預の注に「樵、薪也」(樵は、薪なり)とある。

「辛苦」は古くより見える語であり、張籍の用例も多く、このほかに五例。農事の苦労を詠むものが多く、既に31「賈客樂」(巻一)に「農夫税多長辛苦、棄業寧為販宝翁」(農夫税多く長に辛苦し、業を棄てて寧ろ販宝の翁と為らん)、419「江村行」(巻七)に「一年耕種長辛苦、田熟家家將賽神」(一年の耕種 長に辛苦し、田熟せば 家家 賽神を將う)とあった。この二例は農事の苦労を詠み、もう一例の178「贈殷山人」(巻三)も同じ。他の二例は行旅の苦労を詠み、19「各東西」(巻一)「道路悠悠不知処、山高海闊誰辛苦」(道路悠悠として処を知らず、山高く海闊く誰か辛苦せん)、32「羈旅行」(巻一)の「誰能聽我辛苦行、為向君前歌一声」(誰か能く我が辛苦の行を聞き、為に君前に向いて一声を歌う)とある。「辛苦」の用例については、それぞれの【語釈】を参照。

次の二句と四句で一韻となる冒頭の二句。たきぎには枯れた枝が選ばれること、そのようなたきぎは山奥にあるが、それを運搬するのは困難であることが述べられる。隠遁や困窮といった従来の採樵のイメージから離れて、採樵の実情を述べることから始める。

### 3・4 秋来野火烧樵林、枝柯已枯堪採取

「秋来野火烧樵林」秋になると野火が樵の林を焼く。李樹政は秋になって野火が樵の林を焼き、枝が枯れて、ちょうど伐りとりやすくなるのだと言う。

「秋来」は秋になると。「来」はより以前の意。常用の語のようだが、古く経書や諸子に用例は見当たらず、晋・曹摅「答趙景猷詩九章」其九(『文館詞林』卷一五七)に「秋来冬及、節変歳移」(秋来たりて冬及び、節変じ歳移る)とあるのが、古い用例のようである。これは秋が到来し冬となり、時節が移りゆくことを言う。他に庾信「重別周尚書詩二首」其一(『庾子山集注』卷四)に「惟有河辺雁、秋来南向飛」(惟だ河辺の雁の、秋来たり南向して飛ぶ有るのみ)とあり、これは秋になると雁が南に飛びゆくことを言

う。

唐に至って詩の用例は多く、秋のさまざまな景物が詠まれるようになる。王績「古意六首」其五(『全唐詩』卷三七)に「桂樹何蒼蒼、秋来花更芳」(桂樹 何ぞ蒼蒼たり、秋来たりて 花は更に芳し)、裴迪「輞川集二十首・宮槐陌」(『全唐詩』卷二二九)に「秋来山雨多、落葉無人掃」(秋来たりて 山雨多く、落葉 人の掃く無し)とある。前者は秋になって桂の花がさらに香り始め、後者は秋になって山の雨が多くなることを言う。

杜甫の用例も多く六例。秋の自然の変化を言うものには、「秋雨嘆三首」其三(『詳注』卷三)に「秋来未會見白日、泥汚后土何時乾」(秋来たりて未だ會て白日を見ず、泥汚后土 何れの時か乾かん)とあり、秋となって雨が続き太陽が現れなくなったことを言う。

張籍の用例は四例。27「関山月」(巻一)に「関山秋来雨雪多、行人見月唱边歌」(関山秋来たりて雨雪多く、行人月を見て边歌を唱う)とあり、秋になって辺境の山には雨や雪が多くなることをいう。他の二例は秋に桃が実ること(443「新桃」)、草木が繁ること(144「和左司元郎中秋居十首」其一)を言う。

「野火」は野原に広がる火。李冬生は秋に草を焼くために放った火が樵の林にまで及んでしまったとする。「野火」の張籍の用例は、すでに32「羈旅行」(巻一)に「荒城無人霜滿路、野火烧橋不得度」(荒城 人無く 霜路に満ち、野火 橋を焼き 度を得ず)とあり、野火が橋を焼き落として渡ることができないことを言う。「野火」の用例については、その【語釈】を参照。

いま、野火の災いが山林や建物を焼いてしまう例をいくつか示せば、『史記』亀策列伝に神龜のいる江南の嘉林のことを説明して、「嘉林者、獸無虎狼、鳥無鷓鴣、草無毒螫、野火不及、斧斤不至、是為嘉林」(嘉林は、獸に虎狼無く、鳥に鷓鴣無く、草に毒螫無く、野火 及ばず、斧斤 至らず、是れを嘉林と為す)とあり、これは野火の災いも嘉林には及ばないことを言う。

『三国志』魏書・管寧伝に引く『高士伝』に、「隱者焦先のことを述べて、「其後野火烧其廬、先因露寝。遭大雪大至、先祖臥不移、人以為死、就視如故、不以為病」(其の後 野火 其の廬を焼くに、先は因りて露寝す。冬に雪の大いに至るに遭ひ、先は祖臥して移らず、人以て死せりと為し、就きて視るに故の如し、以て病と為らず)とあり、野火が焦先の小屋を焼き、彼は野宿することとなったことを言う。また『旧唐書』崔損伝には、貞元十四年の秋に唐の太宗が葬られた昭陵の宮殿が野火に焼かれたという記事も見える。

唐より前の詩の用例は少なく、曹植「吁嗟篇」(『古詩紀』卷一三)に「願為中林草、秋随野火燔」(願わくは中林の草と為り、秋に野火に随いて燔か

れん」とあり、秋に林の草が野火に焼かれることを言う。

唐に至って、初唐の詩には用例がなく、盛唐に至って用例が多くなる。岑参「登古鄴城」(『校注』卷一)に「東風吹野火、暮入飛雲殿」(東風 野火を吹き、暮れに飛雲の殿に入る)とある。これは野焼きの火が古城に及ぶことを言う。

杜甫の用例は一例のみであり、その「李潮八分小篆歌」(『詳注』卷一八)の「嶧山之碑野火焚、棗木伝刻肥失真」(嶧山の碑 野火焚かれ、棗木の伝刻 肥えて真を失う)は、嶧山の碑文が野火に焼かれたことを言う。

陳注は白居易「賦得古原草送別」0671「野火烧不尽、春风吹又生」(野火烧きて尽きず、春風 吹きて又生ず)を引く。これは野火に焼かれた草は春にはまた芽吹くことを言う。

「野火」は意図的に野に火をつける場合と、災禍としての野に火が広がる場合があり、前者であれば、無用の材である櫟を薪として有効に利用しようとする採樵の知恵を言うことになり、後者であれば、災禍がかえって福となることを言うことになろう。

「櫟林」は櫟の林。諸注は、櫟は燃料として用いられる木材で、焼いた後に炭としたものを「櫟炭」と言い、また材質が硬いために敲くと高く澄んだ音がするので「鋼炭」と言うと言明する。

「櫟」は古くは『毛詩』秦風「晨風」にそれぞれが所を得ていることを示す例として、「山有苞櫟、湿有六駘」(山に苞櫟有り、湿に六駘有り)と見える。また『莊子』人間世では、匠伯が弟子に櫟の木は、重くて舟の材にならず、腐りやすく棺桶の材にもならず、壊れてしまうので器にもならないと理由を列挙して、櫟の木は役に立たないので長生きして大木になるのだと説明しており、櫟の木は無用の木と考えられていたことが分かる。

唐より前の詩の用例には、謝安「与王胡之詩六章」其四(『文館詞林』卷一五七)に「櫟不辭社、周不駘吏」(櫟は社を辞せず、周は吏に駘かず)とあり、北魏・高允「答宗欽詩十三章」其五(『魏書』宗欽伝)に「伊余櫟散、才至庸微」(伊れ余は櫟散にして、才は庸微に至る)とある。両者ともに『莊子』を踏まえ、前者は、櫟の木が伐られることなく社に祭られることを言い、後者は自分が櫟のように無用であることをいう。

唐になっても詩の用例は少なく、初唐には用例は見当たらない。盛唐に至って杜甫「壯遊」(『詳注』卷一六)の「呼鷹早櫟林、逐獸雲雪岡」(鷹を早櫟の林に呼び、獸を雲雪の岡に逐う)とあり、「櫟」は「櫟」に作るテキストもある。ここは若き日の放蕩の様子を描く部分であり、「早櫟」は馬小屋の意もあるが、ここでは「雲雪岡」との対応から考えても、黒(早)く鬱蒼と茂った櫟(櫟)の林まで狩猟に行ったことを言うのであろう。

杜甫以後、中唐期に詩の用例が見え始め、この他に大曆十才子の李嘉祐「登楚州城望駢路十餘里山村竹林相次交映」(『全唐詩』卷二〇六)に「十里山村道、千峰櫟樹林」(十里 山村の道、千峰 櫟樹の林)とあり、また歐陽詹「寓興」(『全唐詩』卷三四九)に「桃李有奇質、樗櫟無妙姿」(桃李に奇質有り、樗櫟に妙姿無し)とある。前者は楚城から城外の山村の周囲に広がる峰や櫟の林を詠み、後者は美悪いずれも春の恵みを受け、「妙姿」の無い樗と櫟も恵みを受けることを言う。

「櫟林」の例は、張籍以外には王建の「荊門行」(『王建詩集』卷二)に「峴亭西南路多曲、櫟林深深石鏃鏃」(峴亭の西南 路多く曲がり、櫟林深深として石鏃鏃たり)とあり、これは襄陽の峴山周辺の行路の険しさを描き、櫟の林は深く、岩山が屹立するさまを言う。

「櫟」は無用の材としてのイメージがあるが、次の句で焼けた櫟の枝を薪として採取しており、張籍は無用の材が野火に焼かれることによって、薪として有効に利用されることを述べる。

「枝柯已枯堪採取」野火に焼かれて櫟の枝も枯れてしまい、薪として採取することができ。

「枝柯」は木の枝。古くは『焦氏易林』困に「鷹棲茂樹、猴雀往来。一撃獲兩、利在枝柯」(鷹は茂樹に棲り、猴雀往来す。一たび撃ちて兩を獲、利は枝柯に在り)とあり、これは鷹がとまる木の枝を言う。

唐より前の詩の用例には、魏・曹植「妾薄命行」(『古詩紀』卷一三)「仰汎龍舟緑波、俯擢神草枝柯」(仰ぎては龍舟を緑波に汎べ、俯しては神草の枝柯を擢く)、劉孝威「古体雜意詩」(『玉臺新詠』卷十)に「葉落枝柯淨、常自起箕張」(葉落ちて 枝柯 淨く、常に自ら起ちて箕張す)とある。前者は舟に乗って神草(靈芝又は芙蓉)を摘み取ることを言い、後者は厳しい寒さのために葉が落ちて、木々の枝に何も無いことを言う。

唐に至って、詩の用例は全体的に少ない。初唐・盛唐に用例は見られず、中唐から用例が見える。韓愈「石鼓歌」(『繫年集釈』卷七)に「鸞翔鳳翥衆仙下、珊瑚碧樹交枝柯」(鸞は翔け鳳は翥ぶ 衆仙の下、珊瑚碧樹 枝柯を交う)とあり、白居易「同諸客携酒早看櫻桃花」2336に「緑錫粘蓋杓、紅雪压枝柯」(緑錫は蓋杓に粘り、紅雪は枝柯を压す)は、前者は石鼓文の形状を描写して、珊瑚碧樹が枝を交えるようにであることを言い、後者は花が枝に満開の様子を言う。

杜甫に用例はなく、張籍には四例。80「古樹」(卷二)に「古樹枝柯少、枯來復幾春」(古樹 枝柯少く、枯れ来たりて 復た幾春ならん)とあり、枯れた古樹には枝が少ないことを言う例が見える。

「已枯」は枯れてしまつて、生気がないことを言う。植物や人間の凋落・衰亡したさまを言うのに用いられる。『後漢書』袁安伝に引く張俊の上書文に「廷尉鞠遣、歐刀在前、棺絮在後、魂魄飛揚、形容已枯」(廷尉 鞠遣し、歐刀 前に在り、棺絮 後に在り、魂魄 飛揚し、形容 已に枯る)とあり、これは処刑を前にして意気消沈した姿を言う。また『三国志』劉廙伝に引く劉廙の上疏文に、罪を許された感謝を述べて「臣罪愆傾宗、禍庇覆族。遭乾坤之靈、值時來之運、揚湯止沸、使不焦爛、起烟於寒灰之上、生華於已枯之木」(臣が罪は応に宗を傾くべく、禍は応に族を覆すべし。乾坤の靈に遭い、時來の運に値い、湯を揚げて沸を止めて、焦爛せざらしめ、烟を寒灰の上に起こし、華を已に枯れし木に生ず)とあり、「已枯之木」とはもはや生気なく枯れてしまつた木を言う。

唐より前に詩の用例は見当たらず、唐に入つても用例は少ないが、植物や人間の凋落・衰老するさまの他に、人々が疲弊するさまにも用いられる。いま植物の姿を描く例を挙げると、王績「九日作」(『全唐詩』卷二一九)に「莫将辺地比京都、八月嚴霜草已枯」(辺地を將つて京都に比する莫かれ、八月 嚴霜ありて草已に枯る)とあり、寒さ厳しい辺地は八月には霜によつて草が枯れてしまつてゐることを言う。

杜甫の用例は一例、「蘇端薛復筵簡薛華醉歌」(『詳注』卷四)に「少年努力縦談笑、看我形容已枯槁」(少年努力して談笑を縦にせん、看我が形容の已に枯槁なるを)とあり、これは自らの身体がもはや老い衰えてしまつてゐることを言い、若者に今を楽しめと勧めめる例。

張籍の例は一例のみ。「採取」はとりあつめる。『漢書』楚元王伝に劉向が『列女伝』を編纂した理由を説明して「向以為王教由内及外、自近者始。故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顯家可法則、及孽嬖乱亡者、序次為列女伝、凡八篇、以戒天子」(向以為えらく王教は内由り外に及び、近き者より始まると。故に詩書の載する所の賢妃貞婦を採取し、国を興し家を顯すに法則とすべきこと、及び孽嬖乱亡なる者、序次して列女伝を為し、凡そ八篇、以て天子を戒む)と云う。ここは詩・書に記録される優れた女性をとり集めることを言う。

唐より前の詩の用例は少なく、「董逃行」古辞(『宋書』樂志三)に「教教凡吏受言、采取神藥若木端」(凡吏に教え教して言を受け、神藥の若木端を採取せよ)とあり、長生を願う者に神藥である若木の端を採れと命ずる例が見える。

唐に入つて、詩の用例は少なく、張籍以外には劉禹錫「和牛相公題姑蘇所寄太湖石兼寄李蘇州」(『箋証』外集卷六)に「採取詢鄉臺、搜求按旧經」(採取は郷臺に詢り、搜求は旧經を案ず)、寒山詩(『全唐詩』卷八〇六)に「無

食自采取、莫共羊謀羞」(食無くして自ら採取し、羊謀の羞を共にする莫し)とある。前者は太湖石は土地の古老に尋ねて採取することを、後者は自ら食料(恐らくは植物)を採取することを言い、いずれも自然に存在するものを採って採ることを意味する。

冒頭二句で薪には枯れた樹木を選ぶとしたことを承けて、秋になると野火が樵の林を焼き、そのために枯れた樵を薪とし採取できることを言う。【語釈】で述べたように、「野火」が意図的なものか、それとも災禍なのかで、解釈は異なつてくるが、「野火」によつて無用の樵が薪として有効に利用できるという、従來のイメージとは異なつた採樵の側面が示されている。

#### 5・6 斧声坎坎在幽谷、採得齊稍青葛束

「斧声坎坎在幽谷」斧の音がカンカンと深い谷に鳴り響く。

「斧声」は斧で木を伐る音。古く經書や諸子・史書に用例はなく、唐より前の詩の用例も見当たらないようである。唐に入つても詩の用例は二例のみ、張籍「樵客吟」以外には、晚唐の陳陶「双桂詠」(『全唐詩』卷七四六)に「琉璃宮殿無斧声、石上蕭蕭伴僧老」(琉璃の宮殿 斧声無く、石上蕭蕭として僧と伴に老ゆ)とある。これは沃洲の山中には斧で木を伐る音は無く、二本の桂樹がいつまでも伐られるがないことを言う。

杜甫には「斧声」の用例は見られないが、「當屋」(『詳注』卷一四)に「寂無斤斧響、庶遂憩息歛」(寂として斤斧の響無く、庶に憩息の歛を遂ぐ)とあり、「課伐木」(『詳注』卷一九)に「尚聞丁丁声、功課日各足」(尚お聞く丁丁の声、功課 日に各の足る)とある。前者は家が完成して木を伐る音も聞こえなくなつたことを言い、後者は召使いが牆の穴をうめる木を伐つてゐる音を言う。いずれも家屋の建築や修理のために木を伐りだす音として用いられている。

また劉禹錫「裴祭酒尚書見示春歸城南青松塢別墅寄王左丞高侍郎之什命同作」(『箋証』卷二三)に「幽谷響樵斧、澄潭環釣磯」(幽谷 樵斧に響き、澄潭 釣磯に環る)と、深い谷に響く樵の斧の音を詠み、隱遁の場所としてこの地がふさわしいことを言う。

「坎坎」は「毛詩」魏風「伐檀」を踏まえ、ここは木を伐る音。陳注も引く「毛詩」魏風「伐檀」に「坎坎伐檀兮、實之河之干兮。河水清且漣漪」(坎坎 檀を伐る、之を河の干に實く。河水清くして且つ漣漪たり)とある。詩序によれば、「伐檀」は功績のないものが俸禄を受け、君子が出仕すること



ができないことを言う。鄭箋には「是謂君子之人不得進仕也」（是れ君子の人の進仕するを得ざるなり）とあり、これは君子不遇の状態を言うと解釈されている。

「坎坎」の古い用例は『毛詩』魏風「伐檀」以外に、『周易』坎・六三の象伝に「来之坎坎、終無功也」（来るも之くも坎坎たりとは、終に功無きなり）とあり、この「坎坎」は困難を言う。また『毛詩』小雅「伐木」に「坎坎我、蹲蹲舞我」（坎坎として、我に鼓し、蹲蹲として、我に舞う）とあり、『爾雅』積訓に「坎坎噂噂、喜也」（坎坎噂噂は、喜ぶなり）とあり、これは太鼓の音で、喜びを表す。

唐より前の詩には用例は見えず、梁簡武帝「馬宝頌并序」（『文苑英華』卷七七八）に「含生欣欣、若耘耰之逢夏雨。懷情坎坎、譬草木之值春風」（含生 欣欣として、耘耰の夏雨に逢うが若し。懷情坎坎として、草木の春風に値うに譬う）とあり、これは喜びを表す例。

唐に入つて、詩の用例は初唐になく、盛唐以降に見える。しかし、斧の音を示す例は少なく、太鼓や樂の音を示す例が多い。王維「魚山神女祠歌二首・迎神曲」（趙注本卷一）に「坎坎擊鼓、魚山之下」（坎坎として、鼓を撃つ、魚山の下）とあり、韋忠物「鼗鼓行」（『校注』卷九）に「寒声坎坎風動、忽似孤城万里絶」（寒声坎坎として風動く、忽として孤城の万里に絶ゆるに似たり）とあり、両者はいずれも太鼓の音の形容であり、前者は神を迎えるための音楽、後者は広陵城の城頭から聞こえる鼗鼓の寂しげな音を形容する。

木を伐る音の例は、張籍以外に、顧況「上古之什補亡訓伝十三章・十月之郊一章」（『全唐詩』卷二六四）に「万人揮斤、坎坎有厲」（万人 斤を揮い、坎坎として厲しき有り）、皎然「冬日天井西峰張鍊師所居」（『全唐詩』卷八一七）に「坎坎山上声、幽幽林中語」（坎坎たり 山上の声、幽幽たり 林中の語）とある。前者は多くの人が宮殿を築くために木を伐っていることを、後者は山上から木を伐る音が聞こえてくることを言う。

「幽谷」は奥深い谷。ここでは採樵の場所が山の奥深いところであることと言う。陳注の引く『毛詩』小雅「伐木」に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木。嚶其鳴矣、求其友声」（木を伐ること丁丁たり、鳥鳴くこと嚶嚶たり。幽谷より出で、喬木に遷る。嚶として其れ鳴く、其の友を求むる声）とあり、毛伝に「君子雖遷於高位、不可以忘其朋友」（君子は高位に遷ると雖も、以て其の朋友を忘るべからず）、鄭箋に「遷処高木者求其友声、求其尚在深谷者、其相得則復鳴嚶嚶然」（処を高木に遷す者の其の友を求める声あり、其の尚お深谷に在る者を求め、其れ相得れば則ち復た鳴くこと嚶嚶然たり）とあり、高い位を得た人物がかつての朋友を忘れないことを言う。こ

の例は、「幽谷」が高位に遷る前に友と共に過ごした場所であることを言う。また『周易』困・初六の爻辞に「臀困于株木。入于幽谷。三歲不覿」（臀 株木に苦しむ。幽谷に入り、三歳 覿ず）、注に「進不獲拯、必隱遯者也。故曰入于幽谷也」（進みて拯ぐるを獲ず、必ず隱遯する者なり。故に幽谷に入ると曰うなり）とあり、ここで「幽谷」は隱遁の場所を言う。

また特に含蓄するところはなく、深い谷の様子を詠むものに、張衡「南都賦」（『文選』卷四）に「幽谷響岑、夏含霜雪。或岵嶙而纏連、或豁爾而中絶」（幽谷は響岑として、夏に霜雪を含む。或いは岵嶙として纏連り、或いは豁爾として中に絶ゆ）とある。

唐より前の詩の用例には、世に出られない、または世を避ける隱者の住む場所とする例が多く、潘岳「河陽県作二首」其一（『文選』卷二六）に「幽谷茂絨葛、峻巖敷榮條」（幽谷には絨葛を茂らせ、峻巖には榮條を敷けり）とあり、陸機「猛虎行」（『文選』卷二八）に「静言幽谷底、長嘯高山岑」（幽谷の底に静言し、高山の岑に長嘯す）とある。前者は東山に隱棲して彼の地の自然の状況を詠み、後者は世に受け入れられず、深い谷や高い山に過ごすことを言い、いずれも世を避けて隱棲する場所として「幽谷」を用いる。また桓温「薦譙元彦表」（『文選』卷三八）に「中華有顧瞻之哀、幽谷無遷喬之望」（中華に顧瞻の哀有り、幽谷に遷喬の望無し）とあり、これは『毛詩』小雅「伐木」を踏まえて、「幽谷」から高位に移る望みがないことを言う例。その中で、梁武帝「遊鍾山大愛敬寺詩」（『古詩紀』卷六五）には「幽谷響嚶嚶、石瀨鳴濺濺」（幽谷 響くこと嚶嚶たり、石瀨 鳴ること濺濺たり）とあり、『毛詩』小雅「伐木」を踏まえて山中の素晴らしさを言う例も見える。

唐に至っても詩の用例は隱者の住む場所として用いられる場合が多い。ここで隱遁を象徴する以外の例を挙げれば、李嶠「薦」（『全唐詩』卷六〇）に「友生若可冀、幽谷響還通」（友生 冀うべきが若く、幽谷 響き還り通ず）とあり、友を求めような鶯の鳴き声が奥深い谷に響くことを言い、王維「晦日遊大理韋卿城南別業四首」其四（趙注本卷四）に「鵲巢結空林、雉雛響幽谷」（鵲巢 空林に結び、雉雛きて幽谷に響く）とあり、雉の鳴き声が深い谷に響きわたることを言う。

「在幽谷」の例としては、唐の詩の用例に、韋忠物「始除尚書郎別善福精舍」（『校注』卷四）に「明晨下煙閣、白雲在幽谷」（明晨 煙閣に下り、白雲 幽谷に在り）、柳宗元「構法華寺西亭」（『柳宗元集』卷四三）に「反如在幽谷、榛翳不可攀」（反て幽谷に在るが如く、榛翳 攀ずべからず）とある。前者は善福精舍を去る時に隱遁を象徴する白雲が深い谷に漂っていることを言い、後者は樹木が周囲を覆って、まるで深い谷にいるようであること

を言う。

杜甫の用例は一例。「送嚴侍郎到綿州同登杜使君江樓」(『詳注』卷十一)に「檻峻背幽谷、窓虛交茂林」(檻は峻にして、幽谷に背き、窓は虚にして茂林に交わる)とあり、江樓が深い谷を背に高くそびえることを言う。

〔採得〕採取する。獲得する。

古く経書や諸子に用例は見えず、唐より前の詩にも用例は見当たらないようである。

唐に入っても詩の用例は少なく、顧況「露青竹杖歌」(『全唐詩』卷二六五)に「頭插白雲跨飛泉、採得馬鞭長且堅」(頭には白雲を挿して飛泉を跨ぎ、馬鞭の長く且つ堅きを採り得たり)、また皎然「飲茶歌贈崔石使君」(『全唐詩』卷八二一)に「越人遺我剡溪茗、採得金牙爨金鼎」(越人 我に剡溪の茗を遺られ、金牙を採得して金鼎を爨ぐ)とある。前者は馬の鞭となる竹を得たことを、後者は贈ってもらった茶の新芽をとって鼎で煮ることを言う。

〔斉稍〕末端をきれいに揃えた木の枝。張籍以前の用例は未見。

「斉」はひとしくそろえる。張籍の「斉」の用例には、草木が穂先を揃えるさまに用いるものがあり、343「涼州詞三首」其一(卷六)に「辺城暮雨雁飛低、蘆笳初生漸欲齊」(辺城暮雨雁は飛ぶこと低く、蘆笳初めて生じて漸く齊しからんと欲す)、419「江村行」(卷七)に「南塘水深蘆笳齊、下田種稻不作畦」(南塘 水深くして 蘆笳齊しく、下田 稲を種うるに 畦を作らず)とあり、いずれも蘆笳がその長さをそろえることを言う。

「稍」は物の末端で、ここでは枝の末端を指すか。『説文解字』禾部に「稍、出物有漸也」(稍は、物を出だすこと漸有るなり)とある。しかし、張籍以前の詩文に「稍」を木の枝や枝の末端の意で用いる例を見出せなかった。張籍の「稍」はもう一例あるが、それは副詞的に用いられている。

『全唐詩』は「梢」に作る。「梢」は柴の意があり、『広雅』稊草に「梢・校・椶、柴也」(梢・校・椶は、柴なり)とあり、『淮南子』兵略訓の高誘の注に「梢、小柴也」(梢は、小柴なり)とある。

「青葛束」は青葛で薪を束ねる。「青葛」はあおかざら。張籍以前には用例は見当たらず、後代には羅鄴「送張逸人」(『全唐詩』卷六五四)に「石井晴垂青葛葉、竹籬荒映白茅花」(石井晴れて青葛の葉を垂れ、竹籬荒れて白茅の花に映ず)とあり、山居の一景として見える。薪を束ねることは、『毛詩』唐風「綢繆」に「綢繆束薪、三星在天」(綢繆 薪を束ね、三星 天に在り)とある。しかし、薪を葛で束ねることは張籍以前の詩には見いだすことができていない。

「葛」は『毛詩』周南「葛覃」に「葛之覃兮、施于中谷、維葉萋萋」(葛の覃びて、中谷に旋る、維れ葉 萋萋たり)とあり、谷中に盛んに茂る葛の様を詠む。鄭箋には「興者葛延蔓於谷中、喻女在父母之家、形体浸浸日長大也。葉萋萋然喻其容色美盛也」(興とは葛の谷中に延蔓し、女の父母の家に在りて、形体浸浸として日に長大するを喻うるなり。葉の萋萋然たりは其の容色の美盛に喻うるなり)とあり、谷中の葛を若い女性の成長とその美しき容色に喩えるという。

また『楚辭』九歌・山鬼に「采三秀兮於山間、石磊磊兮葛蔓蔓」(三秀を山間に採らんとするに、石 磊磊として 葛 蔓蔓たり)とあり、王逸注に「言己欲服芝草以延年命、周旋山間、采而求之、終不能得。但見山石磊磊、葛草蔓蔓。或曰、三秀、秀材之士隱処者也。言石葛者、喻所在深也」(言うところは己 芝草を服して以て年命を延ばさんと欲して、山間を周旋し、采りて之を求むるも、終に得る能わず。但だ山石の磊磊として、葛草の蔓蔓たるを見るのみ。或いは曰く、三秀は、秀材の士の隱処する者なり。石葛を言うは、深きに在る所を喩うるなり)とあり、芝草(或いは秀れた隠者)を探して山奥深くに至ることを、石と葛によつて表現すると言う。「幽谷」の【語釈】に引いた潘岳「河陽県作二首」其一(『文選』卷二六)にも葛が奥深い谷に茂ることを詠む例が見えた。

ここで「青葛」で薪を束ねるとするのは、木こりが深い谷で薪を集め、それを谷の中で容易に入手できる「青葛」を用いて束ねていることを言う。

次の二句とあわせて四句で一韻。木こりが木の枝を伐り出し、それをきれいに整えて、手頃なかずらで束ねてゆく。ここは木こりの苦勞を描こうとするよりは、彼らが作業に勤しむ姿を写し出そうとしているようである。

#### 7・8 日西待伴同下山、竹担彎彎向身曲

〔日西〕太陽が西に傾く。夕暮れ時。

古く『楚辭』遠逝に「日杳杳以西頹兮、路長遠而窘迫」(日は杳杳として以て西に頹れ、路長遠にして窘迫す)とあり、王逸注に「言日已西頹、年歲卒尽。道路長遠、不得復還、憂心迫窘、無所舒志也」(言うところは日已に西に頹れ、年歲卒に尽く。道路長遠にして、復た還るを得ず、憂心迫窘し、志を舒ぶる所無きなり)とあり、日が西に傾くことは年月が過ぎ尽きてゆき志を得られないことを言い、これを踏まえて、潘岳「寡婦賦」(『文選』卷一六)には「四節流兮忽代序、歲云暮兮日西頹」(四節流れて忽ち代序し、歳云

に暮れ日は西になむ（頹く）と言う。

唐より前の用例は潘岳「寡婦賦」のように『楚辞』を踏まえて、夕暮れに憂愁を抱く例が多い。そのなかで、謝靈運「遊南亭」(『文選』卷二二)に「時竟夕澄霽、雲歸日西馳(時竟りて夕に澄み霽れ、雲歸りて日は西に馳す)とあり、雨上がり夕暮れの爽やかな様を描く例も見える。

唐に入つて、初唐には用例は見えず、盛唐から用例が見える。李白「古風五十九首」其二八(王琦注本卷二)に「草緑霜已白、日西月復東」(草緑にして霜は已に白く、日は西して月は復た東)とあり、王昌齡「留別岑参兄弟」(『全唐詩』卷一四〇)に「日西石門嶠、月吐金陵洲」(日は西す 石門の嶠、月は吐く 金陵の洲)とある。前者は年月の速やかに過ぎゆくことを言う例、後者はかつて謝靈運が遊覧した石門山の夕暮れや金陵の月をいつか岑参兄弟と共に眺めたいと言う。

杜甫に用例は見られず、王建に二例の用例が見えるが、いずれも荒廢した場所の寂寥とした夕暮れに用いている。王建「温泉宮行」(『王建詩集』卷二)に「禁兵去尽無射獵、日西麋鹿登城頭」(禁兵去り尽きて射獵無く、日は西して麋鹿は城頭に登る)とあり、兵士も去り狩獵も行われなくなった温泉宮周辺は夕暮れに麋鹿が現れることを詠む。

張籍には他に用例が一例。268「和韋開州盛山十二首・桃塢」(卷五)に「日西殊未散、看望酒缸頭」(日は西するも殊お未だ散ぜず、酒缸の頭に看望す)とあり、夕暮れになつても賞景してやまず、飲酒を続けることを言う。

友人と時を共にする良き夕暮れを詠む例としては、白居易「傷唐衢二首」其一 0034に「日西並馬頭、語別至昏黑」(日は西して馬頭を並べ、別れを語るは昏黒に至る)とあり、これは、昔、唐衢と酒宴で意気投合し、先に辞去する白居易を唐衢が見送つて夕刻に轡を並べて行き、暗くなつてようやく別れた時のことを回想する。

〔待伴同下山〕仲間を待つて山を下る。

「待伴」の用例は張籍以前には見当たらず、張籍もこの一例のみ。張籍の「伴」の用例には、他にも仕事の仲間という例があり、15「牧童詞」(卷一)に「隔堤吹葉応同伴、還鼓長鞭三四声」(堤を隔てて葉を吹き同伴に応じ、還た長鞭を鼓つ三四声)とあり、475「山中秋夜」(卷八)に「西峰採芝伴、此夕恨無期」(西峰 採芝の伴、此の夕 恨むこと期無し)とある。前者は牧童が草笛で牛飼いの仲間と合図することを、後者は西峰に隠棲する友人と再会して山中に葉を求める約束をしなかったことを悔やむ例。

「下山」は山を下る。「古詩八首」其一(『玉臺新詠』卷一)に「上山採藤蕪、下山逢故夫」(山上りて藤蕪を採り、山を下りて故夫に逢う)とあり、

藤蕪を採りに山に登り、採取を終えて山から下ることを詠む。古詩では山に登るのは棄婦だが、唐詩には隠者や山寺を訪れて夕方に帰つてくることを詠む例も見える。宋之問「下山歌」(『全唐詩』卷五一)に「下嵩山兮多所思、携佳人兮步遲遲」(嵩山より下りて思う所多し、佳人を携えて歩むこと遅遅たり)、劉長卿「龍門八詠・渡水」(『全唐詩』卷一四八)に「日暮下山來、千山暮鐘發」(日暮れて山を下りて來たり、千山 暮鐘發す)とある。前者は隠者との別れを惜しみつつ嵩山を下りることを、後者は龍門山から夕暮れに下りてくることを詠む例。

日暮れに山から下りてくる樵の姿は、孟浩然「采樵作」(『全唐詩』卷一五九)に「日落伴將稀、山風私蘿衣」(日落ちて伴將稀にして 山風 蘿衣を払う)とあり、太陽が沈む頃になると仲間も稀になつて独り山を下ることが詠まれる。

杜甫に用例は見当たらず、張籍には他に一例、97「遊襄陽山寺」(卷二)に「間遊殊未徧、即是下山時」(間遊 殊お未だ徧かざるに、即ち是れ山を下る時)とあり、これは山寺を訪れてまだ遊びに飽かないうちに山を下る時となったことをいう。

〔竹担彎彎向身曲〕竹製の天秤棒が弓のようになって体の方に曲がる。天秤棒が体のほうに仕なるほど多くの薪を運ぼうとしていることが分かる。

「竹担」は竹製の天秤棒。張籍以前の用例は見当たらない。薪を担うことに「擔」を用いる例は、『晋書』祖逖伝に「躬自儉約、勸督農桑、克己務施、不畜資産、子弟耕耘、負擔樵薪」(躬自ら儉約し、農桑を勸督し、己に克ちて施しに務め、資産を畜えず、子弟耕耘して、樵薪を負担す)とあり、祖逖が民の為に努め、その子弟たちも農作業や薪拾いに従事したことにより、人心を得たことを言う。

詩の用例に、曹操「苦寒行」(『文選』卷二七)に「擔囊行取薪、斧冰持作糜」(囊を擔いて行きて薪を取り、氷を斧りて持つて糜を作る)とある。これは「擔」の例ではあるが、行役にしたがつて薪を拾いあつめて袋につめて運ぶ苦しみを述べる。唐詩には「担(擔)」を薪を担うことに用いる例は見当たらず、張籍もこの一例のみ。

「彎彎」は古く経書や諸子に用例は見えず、「石鼓詩」(『古文苑』卷一)に「君子之求、彎彎由弓」(君子の求むるは、彎彎たる由弓)とあり、弓を形容する語として見える。

唐より前の詩にも用例は見当たらず、唐に入つても初唐には用例は見られない。盛唐には、岑参「涼州館中与諸判官夜集」(『校注』卷二)に「彎彎月出挂城頭、城頭月出照梁州」(彎彎 月は出でて城頭に挂かり、城頭に月は



出でて梁州を照らす」とあり、陳潤「賦得浦外虹送人」(『全唐詩』卷二七二)に「日影化為虹、彎彎出浦東」(日の影 化して虹と為り、彎彎として浦東に出づ)とある。前者は月の形容、後者は虹の形容であり、いずれも丸く曲がったものを形容する語。

また後代の例だが、皮日休「奉和魯望樵人十詠・樵担」(『全唐詩』卷六一一)に「軋軋下山時、彎彎向身曲」(軋軋 山を下りし時、彎彎 身に向かいて曲がる)とあり、張籍と同じような表現を用いて、薪をたくさん積み過ぎて運び出すときに苦勞することを詠む。

前の二句から続いて、木こりの働く姿を写しとる。彼らは日暮れ時に仲間と待ち合わせて一緒に下山し、それぞれ大量の薪を竹製の天秤棒に下げて下りて行く。孟浩然「採樵作」では仲間はおらず、ひとり下山することを詠むのに対して、張籍は仲間と連れ立って下山することを述べる。また竹製の天秤棒がしなるほど薪を運ぶことは木こりの苦勞を詠むようである。しかし、ここでも彼らの苦勞よりも、彼らの姿を写すことに焦点があり、次の句で日暮れまで作業して下山することの危険性を示すことによつて、彼らの「辛苦」が明らかとなる。

#### 9・10 共知路傍多虎穴、未出深林不敢歇

「共知路傍多虎穴」彼らは帰りの道沿いに虎の棲み家である穴が多いことを知っている。日暮れに木こり仲間が集まって帰るのは、帰り道が危険だから。「共知」はだれもが皆知っている。『漢書』劉輔伝に「天人之所不予、必有禍而无福、市道皆共知之、朝廷莫肯壹言、臣竊傷心」(天人の予さざる所、必ず禍有りて福無し、市道は皆共に之を知るも、朝廷は肯て言を壹にする莫く、臣竊かに心を傷ましむ)とある。

「路傍」は道のそば。劉楨「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「輦車飛素蓋、從者盈路傍」(輦車 素蓋を飛ばし、從者 路傍に盈つ)とある。これは李善注に引く「日出東南行」古辞の「觀者滿道傍」(觀る者は道傍に満つ)を踏まえ、道路の脇に供の者たちが主人の帰りを待っていることを詠む。また徐悱「古意酬到長史漑登琅邪城詩」(『文選』卷二二)に「豈如霸上戲、羞取路傍觀」(豈に霸上の戯れの如くならんや、路傍の觀に取るを羞ずるのみ)とあり、ただ華やかな装いを道沿いの人々に見られるだけの空虚な榮譽は求めないことを言う。

唐に至っても初唐から用例が多い。喬知之「羸駿篇」(『全唐詩』卷八一)

に「玉勒金鞍荷裝飾、路傍觀者無窮極」(玉勒金鞍 裝飾を荷い、路傍の觀者 窮極無し)とあり、陳注に引く崔顥「行經華陰」(『全唐詩』卷一三〇)に「借問路傍名利客、無如此処學長生」(借問す 路傍 名利の客、此処に長生を學ぶに如くは莫し)とあり、街中で名利を求め人物たちに、山中で長生の法を學ぶほうが良いと言う。これらの例において「路傍」は繁華な街中の道を想起させる。

杜甫に用例は見当たらず、張籍には他に二例。16「沙堤行呈裴相公」(卷一)に「路傍高樓息歌吹、千車不行行者避」(路傍の高樓 歌吹を息め、千車行かず 行者は避く)とあり、宰相の裴度が通行する道沿いの樓閣では音楽の演奏が控えられることを言う。その【語釈】も参照。

「多虎穴」は虎の穴が多く、危険と隣り合わせであることを言う。「虎穴」は凶暴なものが居る場所であり、そこに近づくことが危険な場所。陳注の引く『後漢書』班超伝に、鄯善国に使用した班超が同国を訪れていた匈奴の使節を攻撃する計画を述べる段に、「不入虎穴、不得虎子。当今之計、独有因夜以火攻虜。使彼不知我多少、必大震怖、可殄尽也」(虎穴に入らざれば、虎子を得ず。当今の計、独り夜に因りて火を以て虜を攻むる有るのみ。彼をして我の多少を知らざらしめば、必ず大いに震怖し、殄尽すべきなり)とある。また『史記』酷吏列伝・尹賞には、尹賞が長安の凶悪な若者たちを収監する獄を「虎穴」と名付けたとある。

唐より前の詩の用例は見当たらないが、『後漢書』酷吏伝・樊曄に引く涼州の民の歌に「游子常苦貧、力子天所富。寧見乳虎穴、不入冀府寺」(游子 常に貧に苦しみ、力子 天の富む所。寧ろ虎穴に乳するを見るも、冀の府寺に入らず)とある。これは隗囂が滅んだ後、天水太守に任命された樊曄が厳しく取り締まって政情を安定させたことを民が讃えた歌であり、悪人にとつては、虎の穴で虎が子を育てるのを見ようとすると危険よりも、役所に入ることのほうが恐ろしいことを言う。「冀」は天水郡の県名。また「乳虎穴」の『後漢書』の李賢等の注に「乳、産也。猛獸産乳護其子、則搏噬過常。故以喻也」(乳は、産なり。猛獸は産乳して其の子を守らば、則ち搏噬は常に過ぐ。故に以て喩うるなり)とあり、虎は子を育てる時には警戒心も強く、近づくことはより危険となると注す。

唐に入つて、詩の用例は初唐には見えず、盛唐から用例が見え始める。李白「送羽林陶將軍」(王琦注本卷一七)に「万里横戈探虎穴、三杯拔劍舞龍泉」(万里 戈を横たえて虎穴を探り、三杯 劍を抜きて龍泉を舞わしむ)とあり、王維「遊感化寺」(趙注本卷十二)に「龍宮連棟宇、虎穴傍檐楹」(龍宮 棟宇に連なり、虎穴 檐楹に傍う)とある。前者は班彪の故事を踏まえ危地に「虎穴」を求めて勇敢に戦う將軍の姿を言い、後者は感化寺が「虎穴」

と隣接することを言い、危険な場所というよりは、寺が人の訪れない山深い所にあることを言うようである。同じような例に岑参「登嘉州凌云寺作」(『校注』卷四)に「迴風吹虎穴、片雨当龍湫」(迴風 虎穴に吹き、片雨 龍湫に当たる)とあり、これも「虎」と「龍」が対となり、高い山に建つ寺の周囲の景として見える。

杜甫の用例は四例、その場所が山奥であることを示す例と危険な場所であることを示す例がある。「虎穴」が近くにあつて危険な場所であることを示す例としては、「課伐木」(『詳注』卷一九)に「虎穴連里閭、隄防旧風俗」(虎穴 里閭に連なり、隄防 旧風俗もてす)とあり、「太歳日」(『詳注』卷二一)に「愁寂鴛行断、参差虎穴隣」(愁寂たり鴛行断たれ、参差たり虎穴の隣)とある。前者は自分が仮寓する村落は虎穴が近くにあり、それを夔州の旧習に従つて木や竹を組んで垣根を設けることで防ぐことを、後者は朝官の行列に参与することができず、失意のうちに虎穴のそばを過ぎる危険な旅を続けることをいう。

張籍の用例はこの一例のみ。

『全唐詩』は「虎穴」を「虎窟」に作る。「窟」は入声十一「没」の韻。古い用例には、『論衡』遭虎に「好入山林、窮幽測深、涉虎窟寝、虎搏噬之、何以為変」(好んで山林に入り、幽を窮め深を測り、虎窟に涉りて寝ね、虎搏ちて之を噬むは、何ぞ以て変と為さん)とある。これは好んで山林の奥深くまで行き、虎のすみかで寝れば、虎の害に遭うのは当然のことであると云う。ここで「虎窟」は虎のすみかで、人が寝泊まりできるような洞窟のようなところ。

唐より前の詩にも用例は稀で、陸機「猛虎行」(『文選』卷二八)に「飢食猛虎窟、寒栖野雀林」(飢えては猛虎の窟に食い、寒くして野雀の林に栖む)とあり、高い志を持つ人物が、君命を遂行するためには、猛虎のすみかでも恐れることなく食事をすることを言う。

唐に入つて、張籍以前の詩の用例は杜甫の一例のみ。杜甫「覽鏡呈柏中丞」(『詳注』卷一八)に「胆銷豺虎窟、淚入犬羊天」(胆は銷ゆ 豺虎の窟、涙は入る 犬羊の天)とある。これは長安周辺が「豺虎」のような盗賊や「犬羊」のような吐蕃のために荒廃していることを言う。

「未出深林不敢歇」樵たちは深い林を出るまでは休息をとることは無い。山道では虎に襲われる危険があるので、たくさん薪を担っているけれども、休息することなく、急いで山道を下っていくことをいう。

「深林」は人の訪れることも稀な深い林。常用の語のようだが、意外に用例は少なく、『荀子』『莊子』などに用例が数例見える。『荀子』宥坐に引く

孔子の言葉に「且夫芷蘭生於深林、非以無人而不芳」(且つ夫れ芷蘭は深林に生じ、人無きを以て芳しからざるに非ず)とあり、芷蘭が人のいない深林であつても芳香をあげるように、困難なときも修養を続けるべきことを言う。また『楚辞』九章・涉江に「深林杳以冥冥兮、草木茂盛。乃猿狖之所居」(深林杳として以て冥冥、草木茂盛す。乃ち猿狖の居る所なり)とある。

唐より前の詩にも用例は稀であり、江淹「愛遠山」(『江文通集』卷四)に「深林寂以窃窃、上猿狖之所群」(深林 寂として以て窃窃たり、上は猿狖の群れし所)と『楚辞』九章・涉江を踏まえる例が見える。

唐に入つて、詩の用例は初唐には見えず、盛唐より見える。王維「鹿柴」(趙注本卷一三)に「返景入深林、復照青苔上」(返景 深林に入り、復た照らす青苔の上)、「竹里館」(趙注本卷一三)に「深林人不知、明月来相照」(深林 人知らず、明月 来たりて相照らす)とあるのは有名であり、鬱蒼と木々が多い茂り、人が訪れることもまれな「深林」がイメージされる。

杜甫の用例は一例。「独酌」(『詳注』卷一〇)に「步履深林晚、開樽独酌遲」(歩 屨す深林の晩、樽を開きて独酌遅たり)とあり、夕暮れ時に深い林のなかを歩くことを言う。

「歇」は休息する。『説文解字』欠部に「歇、息也」(歇は、息なり)とある。庾信「帰田詩」(『庾子山集注』卷四)に「樹陰逢歇馬、魚潭見洒船」(樹陰に歇馬に逢い、魚潭に洒船を見る)とあり、馬を休めるところを「歇馬」という。「歇馬」の語は杜甫にも見え、杜甫「暫如臨邑至柘山湖亭奉懷李員外率爾成興」(『詳注』卷一)に「野亭逼湖水、歇馬高林間」(野亭 湖水に逼り、歇馬 高林の間)とある。また杜甫には「九月一日過孟十二倉曹十四主簿兄弟」(『詳注』卷二〇)に「力稀經樹歇、老困撥書眠」(力稀にして樹を経て歇み、老困にして書を撥きて眠る)とあり、体力が衰えて木の下で休息することを言う。

張籍の「歇」は一例のみ。

この二句で一韻。前二句を承けつつ、二句目の「深處樵多出辛苦」の内実が示される。山の奥深くまで採樵に行くため、帰りの道は虎の穴が近くにあるような危険な場所を通らなければならない。彼らが連れ立って帰るのはそのためであり、また大量の薪を担っているにも関わらず、休むこともできずに急いで下山しなければならぬ。木こりの辛苦が表現されている部分。

11・12 村西地暗狐兔行、稚子叫時相応声

〔村西地暗狐兔行〕村の西側が土地が暗くなり、狐や兔が出没する。

「村西」の古い用例は経書や諸子には見当たらず、唐より前の詩文にも用例は見いだせない。唐に入ってから、張籍以前の用例に孟浩然「尋菊花潭主人不遇」(『全唐詩』卷一六〇)に「行至菊花潭、村西日已斜」(行きて菊花潭に至り、村西 日已に斜なり)とある。これは菊花潭を訪れたときにはすでに日暮れ近くであったことを言い、「村西」とは村の西はずれのこと。

「地暗」について、徐澄宇は山や林を背にする地帯は、太陽の光が及ばないので、「地暗」というと注す。

古い用例は見当たらず、陳・江総「雨雪曲」(『古詩紀』卷一〇四)に「天寒旗彩壞、地暗鼓声低」(天寒くして 旗彩壞たれ、地暗くして鼓声低し)とあり、これは雪の中を行軍する辛苦を詠み、「地暗」は雪雲に覆われて地上が暗いことを言う。

唐詩の用例は張籍のみ。

「狐兔」は人が訪れず、荒涼とした場所に現れる動物。古く経書や諸子に用例は見当たらない。『史記』匈奴伝に匈奴では「狐兔」を弓で射て食用とすることが記されており、また『後漢書』逸民列伝・矯慎に引く汝南の呉蒼が矯慎に送った書の中に「狐兔」を「燕雀」と併記して小人の喩えに用いる例が見える。

荒廢と「狐兔」が結びつく例は、陳注の引く張載「七哀詩二首」其一(『文選』卷二三)に「狐兔窟其中、蕪穢不復掃」(狐兔 其の中に窟し、蕪穢復た掃わず)とあり、顧みる者もおらず荒廢してしまつた墳墓に狐や兔が穴を掘つて巣くつてゐることを詠む。またその李善注に引く『桓子新論』に「雍門周以琴見孟嘗君曰、臣竊悲千秋万歳後、墳墓生荆棘、狐兔穴其中、樵兒牧豎躑躅而歌其上、行人見之悽愴」(雍門周 琴を以て孟嘗君に見えて曰く、臣は竊かに悲しむ千秋万歳の後、墳墓 荆棘を生じ、狐兔 其の中に穴し、樵兒牧豎躑躅して其の上に歌い、行人 之を見ること悽愴たるを)とある。

張載に先立つ詩の用例には、魏明帝「長歌行」(『古詩紀』卷一二)に「大城育狐兔、高墉多鳥声」(大城 狐兔を育み、高墉 鳥声多し)とあり、宮城の荒廢を「狐兔」の出現によつて示す。以後、六朝期の詩賦には宮殿や陵墓の荒廢を「狐兔」が巣くうことで表現する例がみえる。その中で、梁・范雲「渡黄河詩」(『古詩紀』卷七七)に「不覩人行跡、但見狐兔興」(人行の跡を覩ず、但だ狐兔の興るを見る)とあり、これは人の往来がない場所に狐兔が出没することを詠み、張籍の「樵客吟」に近い例と言える。

唐に入ってから、詩の用例は初唐から見え、狩獵の獲物と宮城や墳墓の荒廢を象徴する例がある。宮城や墳墓の荒廢を象徴する例には、王績「過漢故城」

(『全唐詩』卷三七。卷九四は吳少微の作とする)に「狐兔驚魍魎、鷓鴣嚇

獠狂」(狐兔 魍魎に驚き、鷓鴣 獠狂に嚇す)とあり、劉希夷「洛川懷古」(『全唐詩』卷八二)に「昔時歌舞臺、今成狐兔穴」(昔時 歌舞の臺、今 狐兔の穴と成る)とある。前者は鮑照「蕪城賦」の表現を踏まえて、狐兔が魍魎魍魎に驚き、鷓鴣が悪鬼を威嚇するほど城が荒廢していることを言う。ここでは「鷓鴣」と対となっていることから、「狐兔」は小人の意も含むかもしれない。後者は、かつて歌舞が行われていた場所が、狐兔が穴を掘つて住む場所となつてしまつたことを言う。

盛唐の詩の用例も初唐と同じであり、狩獵の獲物と宮城や墳墓の荒廢を象徴する例がある。荒廢を象徴する例には、李白「憶崔郎中宗之遊南陽、遺吾孔子琴、撫之潸然感旧」(王琦注本卷二三)に「泉戸何時明、長婦狐兔窟」(泉戸 何れの時か明かならん、長く狐兔の窟に帰す)とあり、岑參「梁園歌送河南王說判官」(『校注』卷二)に「當時置酒延枚叟、肯料平臺狐兔走」(當時 置酒して枚叟を延くも、肯に料らんや 平臺 狐兔走ると)とある。

前者は崔宗之の死を悼み、狐兔が巣くうほど年月が経つても、彼がその陵墓から戻ることはないことを言い、後者はかつて栄えた梁の孝王の平台も狐兔が出没するような荒廢した場所となつたことを言う。

杜甫の用例は三例見える。一例は狩獵の獲物、二例は荒廢を象徴する動物として用いられている。杜甫「憶昔二首」其二(『詳注』卷一三)に「洛陽宮殿燒焚尽、宗廟新除狐兔穴」(洛陽の宮殿 燒焚し尽くされ、宗廟 新たに狐兔の穴を除す)とあり、杜甫「八哀詩・贈太子太師汝陽郡王璣」(『詳注』卷一六)に「川広不可派、墓久狐兔隣」(川広くして派るべからず、墓久しくして狐兔隣す)とある。前者は安史の乱によつて洛陽の宮殿は焼失し、宗廟が狐兔が巣くう状態となつたことを言い、後者は汝陽郡王李璣の墓前を訪れることができず、長い年月が経つたことを陵墓が狐兔の穴と隣り合うようになったと表現する。

張籍の用例は、一例のみ。

「稚子」幼い子ども。古く経書や史書に用例は見当たらず、『史記』屈原列伝に、屈原が懷王に秦訪問の中止を進言したのに対して、「懷王稚子子蘭」が秦との関係を断つべきではないと進言して、懷王は秦に行くことある。この「稚子」は年若い子の意味のようである。潘岳「寡婦賦」(『文選』卷一六)に「感三良之殉秦兮、甘捐生而自引。鞠稚子於懷抱兮、羌低徊而不忍」(三良の秦に殉ずるに感じ、生を捐して自ら引くを甘しとす。稚子を懷抱に鞠いて、羌低徊して忍びず)とあるは、夫を失つた寡婦が幼子を残して夫の後を追つて自殺することはできないと言っており、「稚子」は一人では生きてはいけない幼い子どもを指す。



家人の帰りを待つ稚子は、陳注に引く陶淵明「歸去來辭」に見える。陶淵明「歸去來辭」(『文選』卷四五)に「僮僕歡迎、稚子候門」(僮僕 歡迎し、稚子 門より候う)とあり、幼い子どもが父の帰りを待つ門に出迎えにきていることを詠む。これを踏まえて、帰りを待つ幼い子どもを描く例として、江淹「雜體詩三十首・陶徵君田居」(『文選』卷三二)に「婦人望煙火、稚子候檐隙」(婦人 煙火を望み、稚子 檐隙より候う)とある。

唐に入つて詩の用例は多い。いま、家人の帰りを待つ幼子の例を挙げると、孟浩然「贈王九」(『全唐詩』卷一六〇)に「婦人須早去、稚子望陶潛」(婦人 須らく早に去るべし、稚子 陶潛を望む)、李白「遊謝氏山亭」(王琦注卷二〇)に「醉罷弄婦月、遙欣稚子迎」(醉罷みて婦月を弄し、遙かに稚子の迎うるを欣ぶ)とある。前者は「歸去來辭」を踏まえて、陶淵明のごとき王九の帰りを稚子が待っていることを言い、後者は酔って夜帰ってくる作者の帰りを稚子が待って出迎えてくれることを言う。

杜甫の用例は八例。有名な「江村」には針を敲いて釣り針を作る「稚子」を描き、「遣意二首」其二(『詳注』卷九)には「隣人有美酒、稚子夜能賒」(隣人に美酒有り、稚子 夜に能く賒る)とあり、稚子が隣家に酒を掛け買いしに行くことを詠む。また杜甫「自閬州領妻子卻赴蜀山行三首」其三(『詳注』卷一三)に「僕夫穿竹語、稚子入雲呼」(僕夫 竹を穿ちて語り、稚子 雲に入りて呼ぶ)とあり、これは行旅の山道で互いの姿を見失いそうになるので、下僕や子どもたちが声を掛け合って進むことを言う。これは張籍「樵客吟」の夕暮れの暗がりの中で互いの存在を確認しあうことに類似する例。張籍の用例は一例のみ。

〔相応声〕 子どもの呼ぶ声に、下山した父親が返事をする声。

陳注の引く『周易』乾・文言伝に「子曰、同声相應、同氣相求。水流濕、火就燥。雲從龍、風從虎。聖人作而万物睹。本乎天者親上、本乎地者親下。則各從其類也」(子曰く、同声相應じ、同氣相求む。水は湿に流れ、火は燥けるに就く。雲は龍に従い、風は虎に従う。聖人作りて万物睹る。天に本づく者は上に親しみ、地に本づく者は下に親しむ。則ち各の其の類に従うなり)とあり、同類のものは互いに応じ合うことを言う。

また『史記』樂書に「凡音由於人心。天之与人有以相通、如景之象形、響之応声」(凡そ音は人心に由る。天の人と以て相通する有るは、景の形を象り、響の声に應ずるが如し)とあり、天の応報が人に及ぶことが影が形を写しとり、響きが声に應ずるように、速やかであることを言う。

〔応声〕の唐より前の詩の用例には、「為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に「阿母得聞之、零淚応声落」(阿母 之を聞くを得て、零淚 声に應じて

落つ)とあり、また曹植「惟漢行」(『古詩紀』卷一三)に「神高而聰卑、報若響応声」(神は高くして卑きに聰き、報は響の声に應ずるが若し)とある。前者は焦仲卿から自殺の決意を聞かされた母が声を上げながら涙を流すことを、後者は響きが声に應ずるように、神の応報は速やかであることを言う。

唐に入つて、詩の用例は初唐には見当たらず、盛唐以降も用例は稀である。王維「愚公谷三首」其二(趙注本卷九)に「雖則行無跡、還能響応声」(則ち行は跡無しと雖も、還て能く響は声に應ず)とあり、愚公谷の山奥にあって人は知らないのだが、かえって声が響きに應じるように黎昕のような人物が訪れることを言う。

杜甫に用例はなく、張籍もこの一例のみ。

この二句で一韻となり、無事に下山してきた木こりとそれを出迎える子どもの姿を描く。人通りも少ない村の西はずれまで迎えに出ているところから、父の身を案じる子どもの思いが読みとれる。下山してきた父たちに気づいた子は父の名を呼び、重い荷を担いながら危地を脱した父はその声にすぐに応じる。父子の心の交流、両者の安堵と喜びが伝わってくるような情景である。

### 13・14 採樵客、莫採松与柏

〔採樵客、莫採松與柏〕 松と柏を薪とするために採取しないようにと、木こりに語りかける作者のことば。

陳注に引く『論語』子罕篇に「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也」(子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の後に彫むを知るなり)とあり、「松」と「柏」は固い節操を象徴する。「松柏」の用例は『毛詩』から見えるが、「松柏」が薪となることは、「古詩十九首」其十四(『文選』卷二九)に「古墓犁為田、松柏摧為薪」(古墓 犁かれて田と為り、松柏 摧かれて薪と為る)とある。これは古い墓が壊され、墓標であった松柏が薪とされてしまうことを言う。

この墓標の松柏が伐られてしまうことは、他に陶淵明「擬古詩九首」其四(『陶淵明集箋注』卷四)に「松柏為人伐、高墳互低昂」(松柏 人の為に伐られ、高墳 互に低昂す)とあり、初唐・劉希夷「代悲白頭翁」(『全唐詩』卷八二)に「已見松柏摧為薪、更聞桑田變成海」(已に松柏の摧かれて薪と為るを見、更に聞く桑田の変じて海と成る)とある。いずれも墓標の松柏が伐られ(薪とな)ることを時間が推移することの象徴として用いている。また顧況「上古之什補亡訓伝十三章・持斧」(『全唐詩』卷二六四)に「持斧持斧、無翦我松柏兮」(斧を持ち斧を持つ、我が松柏を翦る無かれ)とあり、これは孝子

が兵士に向かつて墓標の松柏を伐つて薪としないでくれと訴えるもの。

張籍の「松柏」の用例はもう一例。26「北邙行」(巻一)に「山頭松柏半無主、地下白骨多於土」(山頭の松柏 半ば主無く、地下の白骨 土より多し)とあり、これは主を失った墓標の松柏を指す。張籍以前の「松柏」の用例については、その【語釈】を参照。

「樵客吟」の「松柏」は、表層的には建築の資材として、その裏面には優秀な人材を象徴すると考えられる。「松柏」を優れた臣下になぞらえる例は、潘岳「西征賦」(『文選』巻一〇)に「勁松彰於歲寒、貞臣見於国危」(勁松は歳の寒きに彰らかに、貞臣は国の危きに見る)とあり、『論語』を踏まえて松を貞節な臣になぞらえる。また劉琨「古艶歌」(『藝文類聚』巻八八)に「南山石嵬嵬、松柏何離離。洛陽發中梁、松樹竊自悲。斧鋸截是松、松樹東西摧」。本自南山松、今為宮殿梁」(南山 石は嵬嵬たり、松柏 何ぞ離離たり。洛陽 中梁を發し、松樹竊かに自ら悲しむ。斧鋸 是の松を截り、松樹東西に摧かる)。本自 南山の松、今 宮殿の梁と為る)とあり、南山の松柏が切り倒されて洛陽の宮殿の梁となることを詠む例が見える。これは豫章山の白楊が根株から離れて洛陽の宮殿に運ばれたことを嘆く古樂府「豫章行」の設定を踏まえたもの。

この他に「松柏」を建築の資材とする詩の用例は見当たらず、唐に入つて、杜甫「送高司直尋封閩州」(『詳注』巻二二)に「初聞伐松柏、猶臥天一柱」(初め松柏を伐ると聞くも、猶お天の一柱を臥す)とある。これは朝廷では新たに宮殿を建築するのに松柏を伐るも、いまだ天を支える柱を用いていないと言う。ここでは「松柏」を優秀な人材になぞらえる。

また孟郊「隱士」(『校注』巻二二)に「松柏忌出山、出山先為薪」(松柏は山を出ずるを忌み、山を出ずれば先に薪と為る)とあり、松柏のような人物は山から出て薪とされることを避けるものだという。

### 15・16 松柏生枝直且堅、与君作屋成家宅

〔松柏生枝直且堅〕松柏の生ずる枝はまつすぐで堅い。

固い節操を象徴する松柏は寒さに耐える強さを持つとされ、先に引いた潘岳「西征賦」以外にも劉楨「贈從弟三首」其二(『文選』巻二三)に、「風声一何盛、松枝一何勁」(風声 一に何ぞ盛んなる、松枝 一に何ぞ勁き)とある。ただし「松柏」の性質を「直」や「堅」を以て表現する例は多くはなく、李白「古風五十九首」其十二(王琦注本巻二)に「松柏本孤直、難為桃李顔」(松柏は本と孤直にして、桃李の顔を為し難し)とあり、「松柏」の性

質を「孤直」と表現する。

「松柏」を「堅」とする例は、儲光羲「上長史王公責躬」(『全唐詩』巻一三六)に「松柏日已堅、桃李日已滋」(松柏日に已に堅く、桃李日に已に滋し)とあり、薛據「初去郡齋書懷」(『全唐詩』巻二五三)に「已經霜雪下、乃驗松柏堅」(已に霜雪の下を経て、乃ち松柏の堅を驗す)とある。

〔与君作屋成家宅〕あなたのために家を作り、立派な屋敷をつくることができる。「君」を『唐詩紀事』は「爾」に作る。

「作屋」は家を建てる。立派な家ではなく、粗末な家や小屋を建てる場合が多いようであり、古い用例は経書や諸子に見当たらず、史書に数例の用例が見える。『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝に引く『魏略』に「其国作屋、横累木為之。有似牢獄也」(其の国の屋を作すは、横に木を累ねて之を為す。牢獄に似たる有るなり)とあり、また『梁書』東夷伝に「其婚姻、婿往女家門外作屋、晨夕灑掃、經年而女不悅、即驅之、相悦乃成婚」(其の婚姻は、婿 女の家に往きて門外に屋を作し、晨夕灑掃し、年を経て女悦ばざれば、即ち之を驅り、相悦べば乃ち婚を成す)とある。前者は東夷国の家を作る方法を説明したもの、後者は彼の地の婚姻の習俗に述べたものであり、門外に飯の小屋を作ることと言う。この他に『南齊書』祥瑞志に「既經旬日、村民張慶宣瓦作屋、又於屋間見光照内外」(既に旬日を経て、村民張慶宣 瓦を屋と作し、又屋間に光の内外を照らす有り)とあり、益州の村で瓦で屋根を葺こうとしたところ、夜に瓦が光り、中から玉璽と璧が発見されたことを言うもので、ここは屋根を作ることと言う例。

張籍より前の詩に「作屋」の用例は見当たらず、張籍にも「作屋」の用例はこの一例のみ。ただし張籍には「為屋」の用例が見え、38「江南曲」(巻一)に「清莎覆城竹為屋、無井家家飲潮水」(清莎 城を覆い 竹を屋と為し、井無く 家家 潮水を飲む)、418「董逃行」(巻七)に「重巖為屋橡為食、丁男夜行候消息」(重巖を屋と為し 橡を食と為し、丁男 夜に行きて 消息を候う)とある。前者は江南の家は竹を組んで屋根を作ること、後者は戦火の洛陽から逃げ出した人々が山中で重なる巖を屋根として生活していることを読む。

「成家宅」は立派な住居をつくりあげる。陳注の引く『焦氏易林』に「无妄 開門内福、喜至我側。加以善祥、為吾家宅。宮城洛邑、以昭文德」(无妄 門を開きて福を内れ、喜は我が側に至る。加うるに善祥を以て、吾が家宅を為す。宮城洛邑、以て文徳を昭らかにす)とあり、吉兆によってそれぞれ立派な住居を得て、そのことよって都城全体が文徳を示すことになることを言う。

「成家宅」の用例は張籍以前には見当たらない。四庫全書本は「家宅」を「家室」に作り、「家室」であれば、『藝文類聚』卷九九に引く『呂氏春秋』に「禹年三十未娶。行塗山、恐時暮失嗣。辞曰、吾之娶、必有応也。乃有白狐九尾而造於禹。禹曰、白者吾服也。九尾者其証也。於是塗山人歌曰、綏綏白狐、九尾龐龐。成于家室、我都悠昌。於是娶塗山女」（禹年三十にして未だ娶らず。塗山に行き、時の暮れて嗣を失うを恐る。辞して曰く、吾の娶るや、必ず応有るなり。乃ち白狐九尾にして禹に造る有り。禹曰く、白は吾が服なり。九尾は其の証なり。是に於いて塗山人の歌に曰く、綏綏たる白狐、九尾龐龐たり。家室を成さば、我が都は悠昌たらんと。是に於いて塗山の女を娶る）とあり（同様の逸話は『吳越春秋』卷四にも見え、そこでは「成于家室」を「成家成室」に作る）、「成于家室」は禹と塗山の女が結婚することを言い、そのことによつて塗山が今後繁栄することを言う。

「家宅」の用例は、古く経書や諸子に見えず、『呂氏春秋』貴直論に「家宅乎齊」（家は齊に宅す）とあるものの、「家宅」で住居を指すものは見られない。史書の用例では、『魏書』術藝伝・王早に、放仇を恐れる人物に救いを求められた王早が占いを立てて助言した言葉に「於鶏鳴時伏在仇家宅東南二里許」（鶏鳴の時に伏して仇家の宅の東南二里許りに在れ）とあり、また同書恩倖伝・趙脩に、趙脩の処罰を命じる詔に「可鞭之、徒、徙敦煌為兵。其家宅作徒、即仰停罷」（之を鞭つこと一百、敦煌に徙して兵と為すべし。其の家宅を徒と作し、即ち停罷せんことを仰す）とある。前者は「仇家」の「宅」（すまゐ、屋敷）の意であり、後者はその一家の意。いずれも「家宅」で住居の意としてはまだ用いられていないようである。

唐より前の詩の用例は見られず、唐に入つても用例は少なく、また「○家」の「宅」という例が多い。「家宅」が一語として用いられている例には、王建「賽神曲」（『王建詩集』卷一）に「但願牛羊滿家宅、十月報賽南山神」（但だ牛羊の家宅に満ち、十月に南山神に報賽せんことを願う）とある。これは家畜が増えることを願うことを言う句で、「家宅」は家の内又は住居の意で用いられている。

杜甫に用例は見られず、張籍もこの一例のみ。

「家室」は、『毛詩』周南「桃夭」の「之子于歸、宜其家室」（之の子于き帰ぐ、其の家室に宜しからん）とあり、「家室」は家庭、一家の意。また『史記』滑稽列伝・優孟に引く優孟の歌に「起而為吏、身貪鄙者餘財、不顧恥辱、身死家室富」（起ちて吏と為り、身貪鄙なる者は財を餘し、恥辱を顧みず、身死して家室富む）とあり、ここは一家、一族の意。

唐より前の詩には、優孟の歌以外に用例は見当たらず、唐に入つても用例は稀である。盛唐以前の用例には、李頎「贈蘇明府」（『全唐詩』卷一三二）

に「不復有家室、悠悠人世中」（復た家室有らずして、悠悠たり 人世の中）とあり、これは家族の意で用いる例。李頎以外には、杜甫「北征」（『詳注』卷五）に「杜子將北征、蒼茫問家室」（杜子 將に北征し、蒼茫 家室を問わんとす）とあり、これも家族の意に用いる。

以上から考えて、「成家宅」であれば、松柏を用いて立派な屋敷を建てることを言い、「成家室」であれば、松柏を用いて家を作り、幸せな家庭を築くことを言うことになろう。

結びの句の韻字が「宅」であれば四句で一韻、「室」（入声五「質」）であればそれぞれ二句で一韻となる。陳注が結句に風刺の意があると言い、他の諸注もこの結びには寓意があると指摘する。「松柏」が優秀な人材に喩えられること、また「松柏」の枝を「直且堅」と表現しているところから推せば、「君」は君主を指すとも考えられ、優秀な人材を適所に登用して立派な国家を作り上げてほしいと願う、筆者の思いが託されていると考えられることでもできよう。

### 【補】

#### 一 「樵客吟」の構成

この詩を換韻ごとにまとめると、一首全体の構成は次のようである。

- 1 5 4 採樵の実状
- 5 5 8 働く木こりの姿
- 9 10 下山時の危険
- 11 12 下山後（帰宅）の喜び
- 13 14 樵客への作者の呼びかけ

冒頭の四句では採樵の実情が詠まれる。冒頭の二句では、たぎぎとなる枯れ枝を求めて山の奥深くに行く必要がある、それを運び出すことに苦勞があることが述べられ、次の二句では「野火」が櫟の林を焼いて枯らしてたぎぎが得られることを言う。採樵の苦勞を言うようであるが、むしろこれまでは知られることのなかった採樵の側面に目を向けて、その実状を語り出そうとするようである。

5句目から8句目は働く木こりの姿を描く。この部分も彼らの苦勞を描く



よりは、彼らが採樵の作業（伐採―収集―運搬）にいそしむ姿を写し出そうとする。

9句目と10句目は彼らが仲間と一緒に帰るのは下山時に危険があるからであることが明らかにされる。これは同時に2句目に示されていた「出辛苦」の意味も明らかにしており、作者が木こりたちの苦労は山に登ってたきぎを採ることよりも、むしろそれを運搬することにあるのだと言わんとしていることが知れる。

11句目と12句目は、山から下りてきた木こりとその子どもの交流を描く。父の帰宅を迎える子どもの姿は、陶淵明以来、詩中に詠まれているが、前二句で下山の危険と苦労が示されていることにより、村はずれの暗がりや父と子が呼び交わしあう情景は、より切実なものとして読み手の心に迫ってくるであろう。

結びの四句は、作者の木こりへの呼びかけ。木こりに対して、「松柏」を薪として採取しないように、建材として有効に用いれば立派な家を建てることのできると呼びかけて結ばれている。

## 二 「樵客」へのまなざし

「樵客」の語としてのイメージは【解題】で述べたので、ここでは採樵又は採樵の人を主題とする詩を、唐詩から幾つかとりだして、張籍「樵客吟」との比較を試みたい。

まず採樵を主題とする詩には、孟浩然の「采樵作」（『全唐詩』巻一五九）がある。

- 孟浩然「采樵作」
- 1 采樵入深山 采樵して深山に入り
  - 2 山深樹重疊 山深くして樹は重畳たり
  - 3 橋崩臥槎擁 橋は崩れて 槎を臥して擁ぎ
  - 4 路險垂藤接 路険しくして 藤を垂らして接ぐ
  - 5 日落伴將稀 日落ちて伴將は稀にして
  - 6 山風払蘿衣 山風 蘿衣を払う
  - 7 長歌負輕策 長歌して 輕策を負い
  - 8 平野望煙歸 平野 煙を望みて帰る

この作品は作者が木こりの視点からその暮らしを詠んだもの。深山に薪を採りに行き、夕暮れに薪を背負って家に帰るまでを詠む展開は、張籍「樵客

吟」と類似する。前半は深い山に採樵に行く苦労を詠む。山に登る道は橋は崩れ、道は険しい。そのように苦労して山に入り、日暮れに帰る頃にはすでに仲間も少なく、山風に吹かれながら下山する。山を下るときには、登るときとは対照的に、歌をうたいながら杖をつきつつ、炊煙を望みながら軽やかに帰ってくる。

採樵の苦労というよりは、深山に登る苦労が描かれており、隠者の山行のうたとしても読めそうである。作者の隠者体験を「採樵」という視点から描いた作品と見ることができ、ここには「樵客」へのまなざしはうかがえない。また彼にとつての「下山」は、採樵（上山）の苦労から解放され、帰宅する喜びを表現する場である。

次に開元十四年（七二六）中の進士で、王維や孟浩然のような山水田園を描く詩を特徴とする儲光義「樵父詞」（『全唐詩』巻一三六）をあげる。

- 儲光義「樵父詞」
- 1 山北饒朽木 山北 朽木 饒く
  - 2 山南多枯枝 山南 枯枝 多し
  - 3 枯枝作採薪 枯枝 採薪と作ること
  - 4 爨室私自知 爨室 私自ら知る
  - 5 詰朝礪斧尋 詰朝 斧を礪きて尋ぬ
  - 6 視暮行歌歸 暮を視て 行歌して帰る
  - 7 先雪隱薛荔 雪に先んじて 薛荔に隠れ
  - 8 迎暄臥茅茨 暄を迎えて 茅茨に臥す
  - 9 清澗日濯足 清澗 日に足を濯い
  - 10 喬木時曝衣 喬木 時に衣を曝す
  - 11 終年登險阻 終年 險阻に登るも
  - 12 不復憂安危 復た安危を憂えず
  - 13 蕩漾與神遊 蕩漾と神遊と
  - 14 莫知是与非 是与非を知る莫し

この作品は、孟浩然が木こりの視点からその暮らしを描くのに対して、木こりの暮らしを外側から描こうとしている。但し、結びの四句に木こりの心境を作者が代弁しており、木こりを完全に客体化してとらえることはできていない。

冒頭の四句は、たきぎとなる朽木や枯枝の在りかを示し、それらを採取して焚き物に用いることが述べられる。次の二句では木こりの一日が描かれ、彼らは朝に斧を磨いて出掛け、夕暮れに歌いながら帰ってくるという。ここ

でも「下山」のイメージは孟浩然と変わることはない。後半は木こりの心に適った山の生活が描かれる。雪が降りそうになれば辟(辟?) 蒞に身を隠し、暖かくなれば茅屋に眠り、清らかな谷川で足を洗い、濡れた衣服は高い木に掛けて乾かす。そのような生活を送っている彼らは、険阻な山に登ろうがそれを憂えることもなく、悠々と心かない、是非の区別もお構いなし。孟浩然の「採樵作」では、山登りの苦勞が述べられていた。儲光義はそのような苦勞も、木こりには無縁なのだとするところに意外性はあるものの、それは世俗から離れ、悠々自適な生活を送る「樵客」の従来のイメージをさらに強化するものと言えるだろう。

これらの作品と張籍「樵客吟」を比較すると、「樵客」に対するまなざしが大きく異なっていることが分かるであろう。孟浩然の「採樵作」はそもそも「樵客」に対するまなざしはなく、自分の隠者体験を語ることに焦点があり、儲光義は「採樵」の生活を描こうとするものの、「樵客」のイメージは、従来のイメージに依拠しており、むしろそれを強化するものである。これに対して、張籍は「採樵」の実状や「樵客」の作業する姿を写しだそうとしており、そこにはイメージの中の「樵客」ではなく、現実の「樵客」を見ようとする張籍のまなざしが見えがえる。

そのことがよく現れているのが、「下山」の描き方であろう。従来の作品において、「樵客」の「下山」は解放と喜びが表現される場であった。張籍はその従来のイメージに対して、「樵客」の苦勞は、むしろ「下山」(運搬)の時にあり、その「下山」の危険と苦勞(もちろん採樵の作業そのものの苦勞も含んだものとして)があればこそ、「下山」の心の解放と喜びがあるのだということ述べる。そして、その「樵客」の心を夕暮れの暗がりと呼び交わし合う親子の姿を写すことで描き出そうとするところに、その表現の巧みさとともに、張籍の「樵客」に対するまなざしが見えがえる。

このような「樵客」に対するまなざしは、張籍以前には見いだしたがたいが、杜甫に夔州の女性たちの「採樵」を描いた杜甫「負薪行」(『詳注』卷一五)がある。

#### 杜甫「負薪行」

- |           |                  |
|-----------|------------------|
| 1 夔州処女髮半華 | 夔州の処女 髪は半ば華しく    |
| 2 四五十無夫家  | 四五十にして 夫家無し      |
| 3 更遭喪亂嫁不售 | 更に喪亂に遭いて嫁すも售れず   |
| 4 一生抱恨長咨嗟 | 一生 恨みを抱いて長えに咨嗟す  |
| 5 土風坐男使女立 | 土風 男を坐して女をして立たしめ |
| 6 男当門戸女出入 | 男は門戸に当たり 女は出入す   |

- |            |                  |
|------------|------------------|
| 7 十猶八九負薪婦  | 十に猶お八九は 薪を負いて帰り  |
| 8 壳薪得錢應供給  | 薪を売って錢を得て 供給に応ず  |
| 9 至老双鬢只垂頸  | 老に至りても 双鬢 只だ頸に垂れ |
| 10 野花山葉銀釵並 | 野花 山葉 銀釵に並ぶ      |
| 11 筋力登危集市門 | 筋力 危に登りて 市門に集い   |
| 12 死生射利兼塩井 | 死生 利を射りて 塩井を兼ね   |
| 13 面妝首飾雜啼痕 | 面妝 首飾 啼痕を雜え      |
| 14 地偏衣寒困石根 | 地は偏く 衣は寒く 石根に苦しむ |
| 15 若道巫山女粗醜 | 若し巫山の女は粗醜なりと道わば  |
| 16 何得此有昭君村 | 何ぞ此に昭君の村有るを得ん    |

冒頭の四句は夔州の女性たちは戦乱によって夫を失った者が多いことが、続く四句では夔州では女性が外に出て働き、多くは薪取りをしてそれを行商して生活の資に当てていることが述べられる。ここまで夔州の女性の実状が述べられ、続く四句では夔州の女性たちの苦勞が述べられる。彼女たちは年老いても、若い女性の髪型のままであり、髪には野の花や山の木の葉が銀製の簪と並ぶようにしている。体力を奮って危険な山で薪を拾って街で売り、生死を顧みずに利を求めてさらに塩井の仕事も行う。そして結びの四句では、彼女たち巫山の女性はもともそうなのではなく、苦勞のためにその容姿までも悪くなるのであり、そうでなければ、この地にかつて彼の王昭君を輩出した村があるはずはないとして結ばれている。

この作品は、山中での「採樵」そのものが主題ではなく、薪拾いからその行商までを行う夔州の女性たちの苦勞を描いた作品であるが、「採樵」を生業とする人物の苦勞とその苦勞を描き出そうとするところは、張籍「樵客吟」とも通うところがある。

#### 三 結句の寓意について

結びの二句について、陳注をはじめとする諸注は、ここに諷刺の意図又は寓意があると指摘する。

15句目に「松柏」の枝は「直」且つ「堅」とあるように、「松柏」は厳しい環境で固い節操を守ること象徴する樹木であり、また優秀な人材を象徴する樹木でもある。この「松柏」を用いて「屋」や「家宅」を作るといふのは、優秀な人材を国家の建設や運営に用いることを連想させる。

また結句の「与君」の「君」は「爾」に作るテキストもあり、第一義には木こりを指すと考えられるが、もしこの「君」が君主を指すと考えるならば、

結句は「松柏」のような優秀な人物を用いて、国家の建設又は運営に大いに役立ててほしいという、張籍の君主に対する願いを読みとることができよう。更に「松柏」は3・4句目の「櫟(林)」とは対照的な樹木であることに注目すれば、無用とされる「櫟」をも薪として用いる木こりに対して、「松柏」は建築の資材として有用なのだから、薪として用いることがないようにと、結びの四句は問いかけていることになるだろう。

このように結句には、木こりが無用の「櫟」と同じように、「松柏」も伐りとつて、薪として用いないように、建築の資材として有用な「松柏」は、それにふさわしく、有効に活用してほしいと願う張籍の思いが託されている。その木こりに対する問いかけが、君主に対する張籍の願いと重なると思われるところに、結句の寓意が読みとられるのである。(佐藤 大志)